２０１０年5月２８日

コンプライアンス・ＣＳＲレポート
（２００９年度）

関西テレビ放送株式会社

— 目　次 —

第１　はじめに　……（1）

第２　２００９年度の経過　……（2）

第３　番組制作等について各部門の取り組み　……（6）
（１）　放送倫理会議の活動　……（6）
（２）　「S－コンセプト」他、本社番組制作部門の取り組み　……（9）
（３）　東京編成制作部門（東京コンテンツセンター）の取り組み・（１１）
（４）　報道部門の取り組み　……（１４）
（５）　スポーツ部門の取り組み　……（１８）
（６）　メディア戦略部門の取り組み　……（２２）
（７）　ライツ関連部門の取り組み　……（２４）
（８）　技術部門の取り組み　……（２８）
（９）　営業部門の取り組み　……（３０）
（１０）イベント開催部門の取り組み　……（３２）
（１１）　番組審議会の活動　……（３３）

第４　視聴者の方々とのつながりやﾒﾃﾞｨｱﾘﾃﾗｼｰ活動　……（３５）
（１）　活性化委員会からオンブズ・カンテレ委員会へ　……（３５）
（２）　視聴者の皆様からのお問い合わせ等への対応状況と
「月刊カンテレ批評」　……（３９）
（３）　ＡＣＡＰの会員企業として　……（４５）
（４）　メディアリテラシー推進活動の現状　……（４６）
（５）　環境対策等、ＣＳＲ活動について　……（５０）
（６）　会見、ホームページ等、企業情報の開示状況　……（５０）

第５　コンプライアンス態勢の構築　……（５３）
（１）　リスクマネジメント態勢等の確立について　……（５３）

（２）　情報セキュリティ態勢について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（５４）
（３）　コンプライアンス・ラインの運用について　・・・・・・・・・・・・（５５）

第６　経営機構等について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（５６）
（１）　機構改革と社長室、改革推進本部の設置について　・・・・・・・（５６）
（２）　経営陣と社員間のコミュニケーション改善について　・・・・（５７）
（３）　関係会社の再構築とグループ政策について　・・・・・・・・・・・・・（５７）

第７　放送人倫理の確立に向けた　教育･研修等　・・・・・・・・・・・・・・・・・（５９）

第８　おわりに　・・・（６１）

第１　はじめに

視聴者の皆さまに対し、２００９年４月から２０１０年３月にいたる２００９年度の当社の活動についてご報告申し上げます。

当社は、２００８年に開局５０周年の節目を迎えると同時に、２００８年４月１７日、会員活動停止という条件付きながら社団法人日本民間放送連盟（民放連）に再入会を果たし、次いで１０月２７日に活動停止処分の解除が承認されました。そのような状態の中、２００９年度は、新たなスタートと位置付け、放送倫理の向上のため微力を尽くしてまいりました。

当社では、２００７年の「発掘！あるある大事典Ⅱ」捏造問題以降、３年あまりにわたり、経営機構改革や内部統制システムの充実をはじめ倫理の向上、番組制作体制の増強などさまざまな課題に取り組んでおります。

２００９年度におきましても、番組制作ならびに放送関連部門における機構改革を実施いたしました。

また番組面以外では、経営と社員とのコミュニケーションをはかり、迅速な経営判断や実現をはかるために社長室を設置したほか、メディアリテラシー推進部の拡張、充実をはかり、コンプライアンス推進局内に置き、具体的な活動を実践しているところでございます。

一方で、２００８年度よりリスクマネジメントシステムの段階的構築に取り組んでいるところですが、２０１０年２月に社員によりますＵＳＢ記録媒体紛失事案が発生し、関係者の方々にご迷惑をお掛けしたことを反省し、情報セキュリティ管理を含む内部統制システムの整備に引続き取り組んでおります。

２００８年秋からの景気後退は、放送広告に特に大きな影響を与え、現在は下げ止まりの状況にあるものの、本格的な回復がみられない状況下であります。

そのような中、当社は収入源の開拓や経費の節減にさまざまな努力を重ねており、放送本業への集中をベースに、放送番組の質や視聴者の皆様へのサービスを低下させることのないよう、心がけてまいります。

今回、２００９年度の活動状況についてご報告いたします。そして、当レポートを視聴者の皆様方に幅広くご覧いただきたいと考えます。

第２　２００９年度の経過

４月　１日（水）　新卒社員２１名入社
「情報セキュリティ管理規程」「情報資産取扱要領」を施行
４月　７日（火）　関西大学社会学部の「マスコミ制作実習」講義開始
新入社員に対し、コンプライアンス関連研修
４月１７日（金）　関西テレビ活性化委員会　第９回会合
活性化委員会特選賞「映像と証言で綴る 昭和の記録」に決定
４月２５日（土）　大阪地方木津市場の人々によるビデオ作品制作支援開始
４月２７日（月）　立命館大学産業社会学部との２００９年度共同研究「１０年後にテレビは生き残れるのか？」開始
４月２８日（火）　リスクマネジメント規程制定
４月３０日（木）　ＣＳ　「関西テレビ☆京都チャンネル」閉局
５月　８日（金）　介護関連事業会社の清算を結了
５月２２日（金）　第１７回放送倫理・コンプライアンス研修会「新しい消費者時代に向けて（テレビとのかかわり）」（蔵本一也 講師）
５月２７日（水）　関西テレビ活性化委員会、「コンプライアンス・ＣＳＲレポート（２００８年度）」に対する見解を表明
５月２８日（木）　「三菱ダイヤモンドカップゴルフ２００９」チャリティー（３１日まで）
５月２９日（金）　決算取締役会開催、全体会議開催
決算取締役会の報告社長記者会見
「活性化委員会の見解を受けて」を発表
６月　１日（月）　人事異動及び機構改革
社長室並びに経営改革本部を設置、経理局を経営管理局に改組
コンプライアンス推進室をコンプライアンス推進局に改称し、
メディアリテラシー推進部を移管、営業局に営業推進部を設置、
クロスメディア事業局を発展させ、メディア戦略局並びに
ライツ事業局を設置、編成制作局制作センターの組織を改革
「クールビズ」実施　（９月３０日まで）
６月　２日（火）　ドキュメンタリー「路地裏のバレリーナ」撮影カメラマンが日本映画テレビ技術協会　映像技術奨励賞を受賞
第４６回ギャラクシー賞　一連の食物アレルギー関連の取材・報道で、報道活動部門の選奨を受賞 並びに開局５０周年キャンペーンＣＭ「ありがとう関西！」ＣＭ部門選奨を受賞

６月　９日（火）　活性化委員と役員との懇談会開催
６月１０日（水）　第１回コンプライアンス委員会開催
６月１７日（水）　放送倫理部会を発展させた放送倫理会議　第１回開催
６月２０日（土）　「キンダーフェスティバル」新型インフルエンザの影響で中止
６月２２日（月）　第６８回定時株主総会
会長、社長、専務１名、常務３名他重任、取締役１名新任
６月２９日（月）　岸和田市の市民グループとの学習会実施
７月　８日（水）　メディアリテラシー　箕面市立中学校へ社員を講師派遣
７月１４日（火）　新放送システムによる放送を開始
７月２２日（水）　社屋内なんでもアリーナ等で、皆既日食観測会開催
７月２８日（火）　メディアリテラシー 高校生によるドキュメンタリー制作
支援開始
７月２９日（水）　心でつながるＰＪチーム　第６回　新メンバーでの初会合
７月３０日（木）　第１回　オンブズ・カンテレ委員会　開催
８月　１日（土）　関西空港カメラをフルオート２４時間稼動収録カメラに更新、天気や災害情報の向上を図る。
８月　３日（月）　社屋内で１週間にわたり「ロボットショールーム」開催
８月　４日（火）　新任管理職研修　開催
８月　６日（木）　夏期社長定例記者会見
８月　８日（土）　社屋内アトリウムで「こどもまつり」開催（９日まで）
箕面市の“こども体験フェア”に出前スタジオ展開（９日まで）
８月２２日（土）　夏休みキッズみんぱく開催（３０日まで）
９月　１日（火）　社内ＳＮＳ運用開始
９月　４日（金）　１０月改編記者発表会を開催
９月　６日（日）　Ｓ－コンセプト「１００キロカロリーショップ～大公開！黄金レシピで健康ＢＯＤＹ～」放送
９月１７日（木）　開局５０周年ドラマ「ありがとうオカン」、日本民間放送連盟賞番組部門・テレビドラマ番組優秀賞受賞
９月２５日（金）　第１８回放送倫理・コンプライアンス研修会「最近のＢＰＯ判断事例やプロダクト・プレースメントについて」（山田健太 講師）
９月２６日（土）　堺市の教育文化センター施設で、子供スタジオを展開
９月３０日（水）　京都の番組制作子会社の業務終了
コンピューターシステム関連の子会社を完全子会社化
１０月１２日（月）　科学番組　Ｓ－コンセプト「緊急招集！体力向上委員会　～いま子ども達のからだが危ない！～」関西地区で放送
１０月１３日（火）　ドラマ「リアル・クローズ」放送開始に伴い「オンエアリンク」

システムスタート
１０月１６日（金）　第２回　オンブズ・カンテレ委員会　開催
１０月１７日（土）　ＦＮＮ近畿中四国ブロック各局等と連携して地震報道緊急訓練実施
１０月１８日（日）　イベント「はたらくくるま」に中継車とＳＮＧ車を展示
１０月２５日（日）　メディアリテラシー関連新番組「テレビの素」スタート
１１月　７日（金）　メディアアート関連番組「ヨーロッパ“最先端アート”への旅」関西地区地上波とＢＳにて放送
１１月１１日（水）　箕面市内の小学校に社員を講師派遣
１１月１３日（金）　西宮市内の小学校に社員を講師派遣
１１月１６日（月）　秋期社長定例記者会見
１１月１６日（月）　コンプライアンス・ＣＳＲレポート(２００９年度上半期）発表
１１月１８日（水）　「民放技術報告会」にて「ヘリコプター位置情報確認システム」「小型報道中継車」「新デジタルマスター」「新字幕システム・番組バンクシステム」「新ＨＤテロップシステム」の５件を発表
１１月２５日（水）　「ＦＮＳあんたが大賞」審査で「ヘリコプター位置情報確認システム」が技術部門賞受賞、「サラウンド効果音送出システム」がアイデア部門賞受賞
１２月　３日（木）　ドキュメンタリー「天のゆりかご～世界の屋根パミールに生きる～」が、アジアテレビ祭で審査員推賞
１２月１１日（金）　リスクマネジメント会議開催
１２月１４日（月）　「淀川の巨大ナマズ　知られざる生態」が関西写真記者協会の協会賞受賞
２０１０年
1月２２日（金）　第３回　オンブズ・カンテレ委員会　開催
1月２２日（金）　宝塚市内の小学校に社員を講師派遣
1月２７日（水）　文化庁芸術祭で、ドキュメンタリー「父の国 母の国 －ある残留孤児の６６年－」が優秀賞を受賞（同作品は、ギャラクシー賞奨励賞、坂田記念ジャーナリズム賞も受賞）
1月２８日（木）　新春社長定例記者会見
２月　１日（月）　ビル管理受託業務の子会社を当社に吸収合併
２月　１日（月）　一部ニュースで、リアルタイム字幕放送開始
２月　３日（水）　当社社員との共同研究で立命館大学の学生が「１０年後の関西テレビは生き残れるか」をテーマに研究発表
２月　３日（水）　当社番組制作者によるパネルディスカッション開催
２月　４日（木）　社員によるＵＳＢメモリー紛失

２月　４日（木）　　リスクマネジメント会議開催
２月　６日（土）　　科学番組　Sーコンセプト「男と女のしあわせ脳研」
関西地区で放送
２月１８日（木）　　リスクマネジメント会議開催
２月１９日（金）　　公正取引委員会主催　下請法講習会に担当者参加
２月１９日（金）　　川西市内の小学校に社員を講師派遣
２月１９日（金）　　民放連「メディア・リテラシー実践プロジェクト報告会」に
担当者参加
２月２５日（木）　　社屋内アトリウムで「生命のメッセージ展」開催（２６日まで）
２月２７日（土）　　インターネットを利用した「Ｒ－１ぐらんぷり２０１０」の
見逃し動画配信スタート
３月　３日（水）　　大阪市内の小学校に社員を講師派遣
３月　５日（金）　　近畿民放１９社主催「第５回 放送倫理セミナー」を当社ホール
で開催
３月　６日（土）　　飲酒事故追放イベント「ＬＩＶＥ ＳＤＤ　２０１０」放送
３月１１日（水）　　情報セキュリティー基本方針 等を制定、講習会を開催
３月２１日（日）　　科学番組　Sーコンセプト「健康ボディで脱メタボ！　レッツト
レーニング」 関西地区で放送
３月２８日（日）　　心でつながるＰＪチーム　近畿大学附属高校制作作品上映会
当社内で開催
３月２９日（月）　　社屋内アトリウムで「ほほえみの森」開催（３０日まで）
３月３１日（水）　　地上デジタル中継局９８局へ、放送エリアのデジタルカバー
７９１万世帯、率９５．９％

第３　番組制作等について各部門の取り組み

（１）　放送倫理会議の活動

２００９年６月度より、従来の「放送倫理部会」は新たな「放送倫理会議」として、コンプライアンス委員会の組織として位置づけられました。

委員には従来の放送倫理部会における、番組関連部局の局長・部長に加え、営業局（業務部長）、ライツ開発局（ライツ事業部長）、メディア戦略局（ゼネラルマネジャー）を加え、放送をめぐる新展開を的確に反映し、放送倫理を放送関連部局全般にわたる社内討議課題とすべく、拡充されました。また座長にコンプライアンス担当役員を充てることとし、「経営」と「制作現場」が放送倫理をめぐる情報・知見の共有の一層の徹底を図ることとしました。

番組審議会の審議事項、視聴者対応事績、活性化委員会（７月よりオンブズ・カンテレ委員会）の討議内容を社内に周知徹底することも、放送倫理会議が主に担うところで、さらに民間放送連盟、ＢＰＯのさまざまな決定などを、解釈・理解して受けとめるための受け皿にもなっています。以下に主な内容を記します。

・第１回　（６月１７日）

２００７年に作成された「番組制作ガイドライン」の改訂について、「放送倫理会議」が主となって行うことを確認しました。

事例検討では、ドラマにおける「警備業」の描き方について、職業に「貴賤」観をいだかせる表現への全般的な注意を共有しました。またドラマ主人公の女児の心臓疾患の具体的な病名がホワイトボードに書かれていることについて、子供の場合、難病の告知はデリケートな問題なので慎重な扱いが望まれるなどを申し合わせました。

ショッピング通販番組や政党ＣＭについて、民間放送連盟からの資料をもとに討議しました。

・第２回　（７月１３日）

リスクマネジメント規程の放送内容に関するリスクマネジメント活動の支援及び管理、番組をはじめとする当社の放送品質のモニタリング及びトラブル発生時の対応という条項に照らして、ＣＭやライツ開発関連番組などについてもこの会議の担務とすることを決定し、ライツ開発局、メディア戦略局もこの会議のメンバーに加わることになりました。

事例検討では、番組とともに商業放送の根幹をなすＣＭについて、営業、考査だけでは収まらない問題も増えている錯綜した状況の中、放送倫理会議の意見を求めることとしました。ショッピング番組が、番組ではなく「広告」「ＣＭ」と取られかねな

い現状についてなどの報告がありました。

・第３回（８月１４日）

「関西テレビ活性化委員会」から発展した「オンブズ・カンテレ委員会」について報告されました。「オンブズマン機能」として視聴者の意見、批判、苦情などを、吟味・検討し、調査を指示したり、当社に改善策を求めること、放送による人権侵害などの抗議、苦情に関しても、独立した立場で調査・検証し、当社に救済措置などの改善策を求めること、そのために「放送倫理会議」の討議内容にも、専門家の立場から意見をいただくことになりました。「内部的自由（制作者としての良心の確立）の保障について」は、当社の番組制作に携わる者が、放送番組基準に沿わない、良心に反する業務を命じられた場合など、事実関係を調査し、当社に対し注意喚起・改善などを求める旨、明示されました。

事例検討については、Ｓ－コンセプト「１００キロカロリーショップ」（９月６日放送）で、「発掘あるある大事典」の捏造問題以後、初めて番組内で実験を取り扱ったことが取り上げられました。実験の内容は人間は一日１７００キロカロリーで十分ということを実証するもので、▽時系列を入れ替えない、▽コメントの強制をしない、▽オーディションで選んだ芸人１人を含む５名の参加者に対し、きちんとルール説明をする、など十分に気をつけたことや、医療監修に加えて、実験を伴う収録とインタビューには必ず社員が立ち会うようにした、事実の通りそのまま放送する、などの報告がありました。また「プロダクトプレースメント番組」についての問題提起があり、次回の議題としました。

・第４回　（９月１４日）

前回に続いて「プロダクトプレースメント番組」について論議されました。フジテレビからネット受けするＮＵＭＯ（原子力発電環境整備機構）一社提供による特別番組（１０月１８日放送）に関して、留意すべき課題などが話し合われました。

事例検討では、誤認を期待するような誇大なラテ欄表記で多くの苦情があったことについて話し合われました。また、放送に関連する事業イベントや、さらに裁判員裁判の公判後の裁判員の会見に関して、議論がなされました。

・第５回（１０月１９日）

第２回オンブズ・カンテレ委員会（１０月１６日）において、「リアル・クローズ」に関連して委員から質問があった旨報告されました。放送内容やスキームを当社側から委員に説明し、委員からは、「新たな試みを行うのは大切」「作品をしっかり作って欲しい」「販売する製品についての品質管理等もしっかりやっていかなければならない」などの意見が出たことも報告されました。この指摘を受け、放送倫理会議で「リアル・クローズ」について総括的な討議を行うこととしました。

ＢＰＯ放送人権委員会決定第４０号「保育園イモ畑の行政代執行をめぐる訴え」において「重大な放送倫理違反」とする勧告が出され（８月７日）、他系列局事例（Ｍ

ＢＳ－ＴＢＳ）ではあるが、学習検討課題としました。自局取材素材が系列局によって恣意的に改竄され人権侵害を引き起こした本事例は速報で８月会議で検討しましたが、その後詳報を得て「勧告」という重い判断が示された真相を学習することで、系列全体の放送倫理上の価値観の共有が必要である、との認識を新たにしました。

・第６回（１１月１７日）

番組審議会（１１月１２日「リアル・クローズ」）より「審議」内容の報告を受け、番組審議会・審議内容が遅滞なく放送倫理会議において血肉化されるスタイルの確立が図られました。ドラマ内容への批評と「オンエアリンク」について番組審議会における「期待と批判」両意見が報告されましたので、先の「オンブズ・カンテレ委員会」のご指摘ともあわせ、放送倫理会議でも継続して討議することとしました。

また当日ＢＰＯ川端委員長から広瀬民放連会長へ手交されたＢＰＯ放送倫理検証委員会決定第７号「最近のテレビ・バラエティ番組に関する意見」速報を入手し、学習しました。

・第７回（１２月１５日）

ＢＰＯ放送倫理検証委員会決定第７号「最近のテレビ・バラエティ番組に関する意見」を前回に続いて学習討議しました。

「意見書」は「“べからず集”ではなく、面白い物を作りつつ、視聴者に対して不快感を抱かせるようなことは避けなければならない、あくまでも前を向きながら何かをやっていこうという貴重なメッセージ」との共通認識を確認、「意見書」を制作現場はじめ広く学習する方途が検討され、社内シンポジウム企画などを検討中と報告されました。

また、改訂準備中の当社「番組制作ガイドライン」についても、自律と内部的自由に拠って「べからず集にしない」との基本認識のもと編集されましたが、改訂に際してはＢＰＯ意見書の真情をさらに血肉化する方向で充実させたいことを確認しました。

・第８回（１月１８日）

ドラマ「リアル・クローズ」の番組連動として試みられた「オンエアリンク」について、　成果と課題を総括討議しました。「オンエアリンク」の新しいビジネスモデルの可能性というポジティブな面、さらに放送倫理面の注意点を議論し、次の機会へ向けての課題を洗い出すべく、前回、前々回に続いて討議しました。１１回連続ドラマの放送が終了し、オンエアリンクの中間データがまとまったこの時点で、担当部長と関西テレビハッズ社長の報告を受けました。

・第９回（２月１６日）

第７回「放送倫理会議」での「リアル・クローズ」総括討議の内容も含め、「オンブズ・カンテレ委員会」（第３回１月２２日）でのご議論が再度報告されました。委員からは、「ファッションを扱ったドラマでのサービスということで、今回オンエアリンクを行ったことは分かるが、物を売るためにドラマが作られてしまうと、視聴者が

そう思うかも知れない。そこをどう考えるかが重要」「副次的な物販が視聴者にメインに見られてしまうと沢山売れたことが良いことで、そのために…という風潮にならないことが確認されるべきだ」「テレビがそのように見られてしまうと、テレビが自分で自分の首を絞めてしまう。これを今後どう生かすかが大事」等のご意見を得たことが報告されました。

また、民放連放送基準審議会（２月１２日）「ショッピング番組に関する対応について」の集中討議で「検討の取りまとめ～論点ペーパー」と民放連標準調査票「テレショッピング調査票」が提示されたことが報告されました。

テレビショッピング調査票については、連盟書式を採用して、当社としてコンプライアンス強化に取り組む旨確認されました。

・第１０回（３月１６日）

ＢＰＯ放送倫理検証委員会決定第７号「最近のテレビ・バラエティ番組に関する意見」に対応する、民間放送連盟ならびに放送各社の取り組みについて　まとめて討議しました。おもな取り組みとしては

（１）関西マスコミ倫理懇談会 吉岡忍氏講演会　１月２６日

（２）社内パネルディスカッション　２月３日

（３）近畿民放１９社共催「放送倫理セミナー」３月５日

（４）民放連シンポジウム「バラエテイ向上委員会」３月１１日

を取り上げました。

この他にメディアプルポによる全スタッフアンケート意識調査や「めちゃイケ」(フジテレビ）でＢＰＯ意見書を「ネタ」化（２月２７日）したことがあり、それぞれについて　総括的な意見交換と討議を行いました。

（２）　「Ｓ－コンセプト」他、本社番組制作部門の取り組み

１）番組全般について

番組の編成制作部門では２００９年度も、視聴者の皆様に楽しんでいただける良質の番組をお届けできるように日々努力を続けてきました。

その中でも、当社の放送エリアの近畿各地に「人間国宝さん」を訪ねる「ぶらりあるき」のコーナーが人気を集める「よ～いドン！」は、平均視聴率が改編前の６．１％から９．５％（３月末現在）と視聴者の皆様の大きな支持を得ることができました。

また、地域の問題、話題を積極的に掘り起こしてきた夕方の報道番組「スーパーニュースアンカー」も好調に推移しており、両番組がベルト番組としてすっかり定着したことは、当社にとりまして大きな財産といえます。

さらに、２００９年４月から月曜１９時に放送しております「冒険チュートリアル」

は、ローカルの１時間番組としては久しぶりのゴールデンタイムでの自社制作となりましたが、地域の皆様の好評を得まして、平均視聴率１４．７％（３月末現在）と健闘しております。

上記番組をはじめ４月に取り組んだ改編が徐々に効果をあげて、視聴率は秋口からその勢いを増し、１０月から４か月連続で月間３冠を獲得することができ、２００９年度上期はゴールデン帯の１冠に留まりましたが、下期は３冠を獲得、年度通期でも後半１位局を猛追した結果、ゴールデンと全日の２冠を獲得しました。

さらに、当社制作の長寿番組「モモコのＯＨ！ソレ！み～よ！」が５月に３００回、「快傑えみちゃんねる」は８月に６００回を迎えることができました。これらは、ひとえに視聴者の皆様の支持のおかげと認識しております。

２）「Ｓ－コンセプト」について

「健康」・「体」・「科学」にまつわる素朴な疑問や関心を科学的な目線で正確に分かりやすく紹介する「Ｓ－コンセプト」シリーズは２００７年以降、１２本を制作してきましたが、２００９年度は新たに４本を制作しました。

９月に放送された「１００キロカロリーショップ～大公開！黄金レシピで健康ＢＯＤＹ～」では、カロリーについて分かりやすく説明を加えながら適切なカロリー摂取のためのオリジナルレシピを紹介しました。

番組内では、低カロリーで美味しさも十分な「黄金レシピ」を基にした適正なカロリー摂取により身体にどのような影響が出るのか、実験を通じてカロリーコントロールの成果を発表しましたが、番組の制作に当っては、東京コンテンツセンター制作部のディレクターが、実験を伴うロケのすべてに立会い、万全のチェック態勢で取り組みました。

１０月には「緊急招集！体力向上委員会～いま子ども達のからだが危ない！～」を制作し、遊び場の減少や塾や習い事などによる自由時間の減少、子どもを狙った犯罪の増加などライフスタイルの変化により低下の一途をたどる子供の体力をテーマに取り上げました。体育の家庭教師の派遣や行政による校庭の芝生化が与える影響や、始業前に有酸素運動をカリキュラムに取り入れた結果、勉学にも好影響を与えた米国の例など体力向上に向けたさまざまな取り組みを紹介しました。

また、２月に放送した「男と女のしあわせ脳研」では最新の脳科学研究で明らかになってきた脳の性差に着目し、地図を描いてもらい、その正確性や特徴から男女の傾向を検証する「地図が苦手な女脳」や、男女の言語表現能力の違いによる「生返事する男脳」を実験などを通じて紹介しました。

さらに４本目として「健康ボディで脱メタボ！レッツトレーニング」を３月に放送しました。

この「Ｓ－コンセプト」シリーズでは、２０１０年度以降も引き続き、科学的な要素を含む番組を視聴者の皆様に正確にわかりやすく伝えるというコンセプトをさらに深

化させていきたいと考えています。

３）受賞関係

当社が開局５０周年記念番組として制作放送しました大阪の下町を舞台に何十人もの里子を育ててきたナニワの名物オカンと、必死で生きようとする里子たちの姿を描いたドラマ「ありがとう、オカン」が平成２１年日本民間放送連盟賞 番組部門・テレビドラマ番組優秀賞を受賞しました。

４）社内シンポジウム

放送倫理・番組向上機構（ＢＰＯ）が２００９年１１月に発表した「最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見」を受けて、当社の制作部員や外部制作会社の社員のほか、社内各部署から計７３名が出席し、２月３日（水）シンポジウムを行いました。

シンポジウムは、パネルディスカッションを中心に進行し、意見書に記載されている「バラエティーが『嫌われる』５つの瞬間について」をテーマに、ディスカッションを行いました。

パネラーからは【イジメや差別】に関しては、「所謂リアクション芸人というジャンルの人たちがいるのも事実」、「芸人を生かすも殺すも演出。事前に丁寧な打ち合わせを行っている」などといった発言がありました。

また、【制作の手の内がバレバレのもの】では、「たくさんの人に見てもらいたいのが本音なので、ＣＭ前で視聴者を煽るようなこともしたが、やめておけば良かったと反省しているものもある」などの意見が出た後、出席者らが普通の感性を磨くよう励むことを確認して閉会しました。

（３） 東京編成制作部門（東京コンテンツセンター）の取り組み

当社の東京における編成制作部門については、２００８年７月より編成制作局の中の東京編成制作センターとして業務を行っていましたが、２００９年６月の機構改革時に名称が東京コンテンツセンターとなり、編成、制作、コンテンツ事業の各部で視聴者サービスを主眼に番組のコンテンツ化、マルチユース化にチャレンジしてまいりました。以下に各部の状況を記します。

１）編成部

編成部は、フジテレビをはじめＦＮＳ系列各社との編成調整と番組企画・調整を主に、番組販売、番組宣伝を担っています。現在は部長以下、編成・番組販売は副部長１名、部員３名、派遣社員１名で、宣伝担当は副部長１名、部員４名、派遣社員１名で業務に

当たっていますが、放送業界を取り巻く市況は依然厳しく、セールス状況も激変を続けており、また、視聴者の多様なニーズに応えるため番組内容や番組尺の急な変更が行われるなどネット番組の調整事項も多岐にわたっています。

そのような中、視聴者皆様の不利益にならないよう、また、当社の営業利益や制作権の確保、コンプライアンスを念頭に日々編成調整を行っています。

２００９年度では、１０月クールの連続ドラマ「リアル・クローズ」で試みた、出演者の衣装情報とその衣装の購入が可能な仕組み「オンエアリンク」においては、営業調整やこの仕組みを利用した番組宣伝、ブームアップに努めました。

また、２月に放送しました「Ｒ－１ぐらんぷり２０１０」では、本社のメディア事業部と組んで、生放送では初の見逃し動画配信をフジテレビの協力のもとフジテレビオンデマンドで実現いたしました。番組配信に関しては視聴者の皆様の需要も多く、今後も様々な番組でトライしていきたいと考えています。

また、番組販売では、各局が番組購入費を削減する中、レギュラー番組や単発番組のセールス状況は厳しさを増しています。しかしながら、２００９年度はかろうじて前年並みの売り上げ実績を残しました。

番組宣伝では、上記のドラマ「リアル・クローズ」で、ファッションブランド・エルメスとコラボレーションで、ファッションショー形式の制作発表を行い話題を呼びました。また、新聞、雑誌などへの広告掲出のほか、交通広告や渋谷の大看板広告展開などを継続的に行ってきています。

さらに２００９年度は、単発バラエティ「新競技　芸能人チャンプ決定戦ＧＯＮＧ」や「追跡！あのニュースの続き」など、関西ローカルで放送し、好評を得たことから、ゴールデンタイムの番組として全国ネットで放送いたしました。今後もこのように、フジテレビはじめ系列各局と調整しながら、より多くの視聴者に楽しんでいただける番組を提供できるよう努めてまいります。

２）制作部

制作部では２００９年度も、火曜２２時のネット・ドラマ枠を引き続き担当しました。まず、４月クールは「白い春」の制作をメディアミックス・ジャパンに委託(放送権譲渡契約)し、当社はプロデューサー２名、アシスタントプロデューサー１名、チーフディレクター１名が参画しました。

阿部寛が好演し、その娘役に「崖の上のポニョ」の主題歌で人気の大橋のぞみが出演、究極の親子愛を描いたドラマとして、好評を得ました。

７月クールは「恋して悪魔」の制作を共同テレビジョンに委託(放送権譲渡契約)し、当社はプロデューサー１名、ディレクター１名が参画し、高校生の純愛を描いたファンタジー・ラブストーリーで、期待の新人を主役に起用し、ドラマ界の未来を担う俳優の育成に注力しました。

１０月クールは「リアル・クローズ」の制作を自社で行い、編成部の項でも触れておりますが、「オンエアリンク」など放送関連のビジネスにもチャレンジしました。

さらに１月クールは「まっすぐな男」の制作をメディアミックス・ジャパンに委託(放送権譲渡契約)し、当社はプロデューサー１名、チーフディレクター１名が参画しました。

自社制作のみならず、制作会社に委託する場合も当社の社員が積極的に制作に参画し、企画から放送までイニシアティブを取りながら、コンプライアンスを遵守してきました。

さらに「グータンヌーボ」「ＳＭＡＰ×ＳＭＡＰ」「ジャーナる（３月終了)」など、レギュラー番組も好調に推移する中、２００９年度は、ネット単発「あのニュースの続き」(８月放送)や正月ネット特番「ガチバトル！」などのバラエティー番組を数々制作し、新たなバラエティー番組を企画開発するとともに、次世代を担うプロデューサー、ディレクターの人材育成にも努めました。

３)コンテンツ事業部

４月から放送した深夜ドラマ「ＮＥＸＴ」を制作、コンテンツ事業部よりプロデューサーが１名参加、制作部から２名、関連会社（メディアプルポ）から１名参加したプロデューサーと共に、各外注制作会社、タレント事務所との綿密な連携をとり１クール１２本の番組の作業を完了しました。また、ＤＶＤの制作・発売に関しては番組を担当したプロデューサーが中心となって本社ライツ事業部と連携して作業に当たりました。

６月からの「ＤＲＡＭＡＤＡ－Ｊ」に関しては、本社制作部のチーフプロデューサー１名、プロデューサー３名、ライツ事業部のプロデューサー１名と共に、無事番組の制作～ＤＶＤの発売までを完了しました。特に、今回は１８歳未満のタレントが主演となっていることから、ロケ日を土日に設定したり、収録を２１時までに終了するなど、法令などに則した業務遂行を心がけました。

８月に放送した単発番組「ギャルネクストラボ」では、系列局、制作会社、通販を扱う子会社の関西テレビハッズ、県域ＵＨＦ局とともに製作委員会方式で番組を制作、ファッション雑誌の読者に人気のギャル達が自らプロデュースする商品を番組が一緒になって開発、販売するという新しい形の番組作りを模索しました。

一方、２００９年度の映画事業についてですが、「のだめカンタービレ最終章・前編」と「ライアーゲーム　ザ・ファイナルステージ」の２つのＦＮＳ２７局共同出資映画は、ともに連続ドラマで好評を博した作品の集大成ともいえる作品で「のだめカンタービレ最終章」に関しては、後編も４月１７日より公開しています。

中山美穂さんが１２年ぶりに女優復帰を果たした夫である辻仁成さん原作の劇場用映画「サヨナライツカ」は、西島秀俊さんや石田ゆり子さんの熱演やイ・ジェハン監督（私の頭の中の消しゴム）の美しい映像が感動を呼んだ作品となりましたが、当社では、フジテレビと共に出資だけでなく、製作段階からプロデューサーも関わってきました。

その他にも、ブログが大きな反響を呼んだ実話をもとにした作品「ブラック会社に勤めているんだが、もう俺は限界かもしれない」の製作にも携わりました。

最後にライツ関連事業ですが、上述のドラマ「リアル・クローズ」において、出演者が着用していた衣装の情報を放送と連動してリアルタイムで視聴者の皆様にご紹介して行くと共に、その衣装を買えるサイトとも連動するという「オンエアリンク」システムを展開しました。

また出版関連では、女性に人気のトークバラエティ「グータンヌーボ」からレギュラー出演者やゲストの名言を抜粋、解説した「グータンヌーボ・女のセキララ名言集　ＬＯＶＥ」を出版しました。

（４）　報道部門の取り組み

文字通り歴史的とさえ思われた華々しい夏の衆院選＝政権交代から、坂道を転げ落ちるような内閣支持率急落へと、失望感・混迷感がいや増す政治動静、長引く不況の閉塞感の中で殺伐とした社会的事件も頻発し、そんな騒然とした世情下で裁判員裁判が始まり、一方では新型インフルエンザパニックに、台風・豪雨被害、津波騒ぎと自然環境も乱れ気味で、２００９年度もまた、報道現場にとっては大きな事件案件が続発する、多忙な１年となりました。

また、厳しい予算方針に基づき、番組制作費の緊縮化、効率的執行が年間を通じて求められ、種々の日常的経費工夫にも神経を使う環境ともなりましたが、そのような中で報道局は引き続きしっかりと気を引き締め、常に各人が放送人としての使命感や倫理感を高く持ち、視聴者に対して公正で正確な報道を届けるべく、業務にあたってきました。

２００７年から進めてきた、日々の作業や社内会議における細密なコミュニケーションを基盤とした、全体的な問題意識や認識の共有も、構内外部スタッフを含め着実に定着しつつあり、個々の局面で発生する取材や放送上での大小様々な問題課題にも、適切かつ迅速な判断で対応することが出来てきています。

１）「スーパーニュースアンカー」を中心とした日々のニュース報道について

５月のゴールデンウィーク明けから、関西地区に集中するような展開で感染拡大した新型インフルエンザは、取材上の安全衛生面にも配慮しつつ系列局の応援も頂きながら、正確な情報を視聴者に届けることに努めました。更に夏以降も特集企画などを継続的に放映し、正しい知識取得と生活面での注意を喚起しました。

また医療関連報道としてはこの他にも、進行性骨化性線維異形成症（ＦＯＰ）などをはじめとした様々な難病や、子宮頸ガンなどの注目すべき疾病、或いは薬物依存症の深刻な実態についても、独自の視点で継続的に取り上げ、光を当てました。

５月施行の裁判員裁判については、制度開始前の特集企画放映を通じ視聴者の理解浸透に努め、関西地区でも具体的判例事案が発生してきた９月以降は、司法の可視化・市民感覚の反映という趣旨を踏まえて担当各地裁との間で交渉を重ね、制度自体の課題にも目を配りながら平明な報道を心がけました。

極端な天候変化が頻発する昨今の気象環境ですが、台風９号の影響による８月９日の兵庫県佐用町などの突発的豪雨災害や、１０月８日に南紀を襲った台風１８号災害などにおいては、発生時から迅速な取材や中継で重層的に報道を行い、現地の状況を詳しく伝えました。

また、いつ起こってもおかしくない大規模地震への報道対応準備として、１０月１７日にはＦＮＮ近畿中四国ブロック各局やフジテレビと連携しての地震報道緊急訓練を実施、１１月９日から２７日の３週にわたっては連日、当社独自に地震発生時のカットイン放送訓練を行いました。

南米チリの大地震により２月２８日、１７年振りに発令された大津波警報は、日本全土の太平洋沿岸部などに影響・被害を及ぼすことが懸念され、ＦＮＮ全社を挙げての特別番組対応となりましたが、当社も南紀方面を中心に迅速に中継・取材体制を組んで情報を伝えました。幸い大きな被害にはなりませんでしたが、今後の大地震等緊急災害時の報道対応における課題や問題点を改めて検証し直す貴重な経験となりました。

２００７年に千葉県で発生したイギリス人女性殺害事件で、現場から逃走、顔を整形しての逃亡生活を送っていた男性容疑者が１１月１０日大阪南港で身柄確保・逮捕されましたが、同日夜の新幹線などによる千葉県への移送においては、新大阪駅を含め各地で取材現場が混乱する状況となりました。当社のみならず全報道メディアにおいて、速報性とともに報道姿勢の適正さなどについて改めて課題が残った事案となりました。

２００９年度で最大かつ最も重要な案件となったのは、夏の終わりに行われた衆議院選挙でした。政権交代が現実のものとなったこの選挙では、これまでにも増して公正・正確を期すとともに、選挙の争点を明確化するための解析的視点に立った報道も心がけました。当日の８月３０日には投票終了の２０時直前から５時間余りの大型開票特別番組「ＦＮＮスーパー選挙２００９審判の日　どこで誰が、未来を変えるのか？」をＦＮＮ系列全局による共同制作にて放送しましたが、当社は同特番内の３時間余りを関西の視聴者に特化した独自の視点でお伝えし、地域に密着した情報提供も心がけました。また劇的な変動で得票環境が流動的な状況の中、当選確実表示についてはＦＮＮ系列全局で全く誤報を出すことなく放送し、視聴者の信頼に応えることが出来ました。

圧倒的な支持を受けてスタートした鳩山連立新政権でしたが、期待された政治改革について目覚ましい進捗もほとんどなく、急速に失速感の増す行政対応が目立ち始め、一向に改善されない不況・雇用不安の中で閉塞感がより高まるような環境となっていきました。そのような中で日々のニュース番組では、ホームレス医療や貧困ビジネス、介護事業や待機児童の問題、或いは地方自治体や中小企業などを巡る厳しい個々の現状など

を、地に足のついた取材で継続的に伝え、徒に政局の動静のみに捉われ過ぎることなく、問題点の本質を出来るだけ明らかにするような報道を心がけました。

２）ドキュメンタリー番組、及びその他単発番組の制作について

２００９年度は、昨年に続いて制作した報道局保存アーカイブ素材編集番組「市電が走った昭和の大阪」を含め、下記の７本のドキュメンタリー作品を制作･放映しました。

・４月２９日放送「父の国　母の国　－ある残留孤児の６６年－」
・７月２０日放送「希望って何？　～不安社会を生きる若者たち～」
・１１月１５日放送「あの日の僕に出会えたら」
・１２月２７日放送「市電が走った昭和の大阪」
・１月１６日放送「震災１５年　神戸・御蔵通りから－まだ見ぬ復興の夢を追って－」
・３月２２日放送「淀川２００９－２０１０　～知られざる生命の営み」
・３月３０日放送「報道スペシャル　手紙　交通事故－それぞれの１０年」

４月に放送した「父の国　母の国」は、現在も矛盾を内包したままの中国残留孤児問題に改めて光を当て、その厳しい社会環境の中で生きる残留孤児の苦悩と誇りをしっかりと描き出した作品で、芸術祭優秀賞、ギャラクシー賞奨励賞、坂田記念ジャーナリズム賞など多くの賞に輝くなど、各所で高い評価を頂きました。この作品は慌ただしい日常の報道取材の中から生まれてきたものでもあり、文字通り報道局全体の総合力の成果であると言えます。

また３月放送の「淀川２００９－２０１０」は、報道映像部カメラマンが総力を挙げ、１年間にわたる長期取材を積み重ねる中から、様々な淀川の姿を映像詩的な作品にまとめあげるという新しい試みであり、その素材の一部は「スーパーニュースアンカー」内でも随時放送されましたが、その中から「淀川の巨大ナマズ　知られざる生態」が関西写真記者協会の協会賞（グランプリ）を、また「真夏の夜空を見上げて～淀川花火大会」が同銀賞をそれぞれ受賞しました。

その他受賞関連では、１１月放送の高次脳機能障害を取り上げた作品「あの日の僕に出会えたら」がギャラクシー賞奨励賞を受賞、更に前年度に放送した作品ではありますが、２００８年７月放送の作品「路地裏のバレリーナ」で、撮影を担当した報道映像部所属のスタッフに対し、日本映画テレビ技術協会の映像技術賞奨励賞が授与されました。また、２００９年１月放送の海外取材作品「天のゆりかご～世界の屋根パミールに生きる～」が、アジアテレビ祭で審査員推賞、更にヒューストン国際映画祭で審査員特別賞を受賞し、国際的評価を頂きました。更に、前年度に「スーパーニュースアンカー」や「Ｓ－コンセプト」で重層的に展開した食物アレルギー関連の取材・報道に対しては、ギャラクシー賞の報道活動部門選奨が授与されました。

これら一連の受賞成果は、日常の報道活動や作品制作活動を通じ、報道現場の各スタッフが日々研鑽に努め、報道人としての意識を高めて業務に当たる中で生み出された結

果であることを素直に喜び、今後も更に精進努力を重ねていきたいと考えています。

さらに３月に報道スペシャルとして放送しました「手紙」は、長年にわたって交通事故被害者の現状について継続的に取材を重ねてきた中から生まれたもので、この番組放送に先立ち、取材の中で関わらせて頂いたＮＰＯ団体いのちのミュージアムとの共同主催により、当社１階の公開空間であるアトリウムを会場に、事件事故の被害者遺品の展示イベント「生命（いのち）のメッセージ展」を開催するなど、社会活動的展開にも広がるものとなりました。

１月放送の「震災１５年　神戸・御蔵通りから」は、１５年を経過した阪神・淡路大震災を、ボランティア活動のありかたの変容や課題など、これまでとは少し異なる視点から掘り下げ、問題提起を行いました。

阪神・淡路大震災についてはこういったドキュメンタリー番組とは別に、発生翌年から１年も途切れることなく放送を続けている、発生時刻での追悼生中継特別番組「この瞬間（とき）に祈る」を１５周年となったこの年も１月１７日早暁に放送し、震災の記憶を新たにするとともに、これも毎年恒例となった防災特別番組「巨大地震・未知の揺れ－阪神・淡路大震災から１５年」を、１月１６日午後放送し、改めて地震や津波などの大規模災害への日常的警戒意識の強化を視聴者に呼びかけました。

３）「編集長メモ」など社内・局内意識の向上へ向けて

コンプライアンス担当者を通じて、報道・スポーツ現場の社員・外部スタッフに対するコンプライアンス関連の情報提供、及び情報開示を目的としてメール配信してきた「編集長メモ」は、引き続きほぼ週１回のペースで継続して届けられており、現場記者やカメラマン、編集部門のみならず、管理職、デスクを含めた全体の問題意識共有、倫理意識向上などに有効に機能しています。

２００９年度で特に注目すべき案件となった裁判員裁判についても、具体的事案が関西地区でも始まった９月以降、現場から上げられてきた細かな情報を基に、この「編集長メモ」を通じて取材上での留意点などについて明瞭かつ詳細に注意喚起を行っていますが、それとは別に制度開始に先駆け４月に、当社報道局独自に「裁判員制度と事件報道」という解説小冊子をまとめ、報道局主催で積極的に社内勉強会を開くなど、全社的に放送上での同制度の扱いなどの留意点について認識を共有することに努めました。

４）海外取材体制、及び放送インフラの整備について

現状の報道展開において、極めて重要な部分を担うヘリコプター取材ですが、２００９年度の４月から運航担当航空会社が、変更になりました。この変更に当たっては特に安全面の維持と確実な業務運営に向け、綿密に調整・交渉を重ね、また運航開始以降も航空会社サイドと日常的に細かくコミュニケーションを取って、安全でスムーズな飛行取材を日々行っています。

一方、２０１０年１１月から新たに運航開始をする予定の次期ヘリコプターＡＷ１３９に関しても、現行ヘリコプターから引き続き運航業務を担当することになる航空会社、及び同機導入の代理店業務を担った会社などと、より高度な安全面と取材面の向上を目指し、きめ細かく調整・交渉を行い、また１２月からは長期間の綿密な操縦・整備訓練を着実に重ねるなど、順調に準備を進めています。

よりグローバルな情報流通が求められている近年の報道活動において、その前提となる海外取材態勢については、ＦＮＮとして戦略的にその拠点を設置しており、当社はその中で、上海、クアラルンプール、ベルリン、パリの４つの支局に人員を配置して責務を担ってきました。しかし、ＦＮＮとしての総合的見地から全体的な見直しが行われる中で、東南アジア、南アジアの取材体制をこれまでのバンコク、クアラルンプールの２拠点体制からバンコク１拠点に統合する判断となりました。クアラルンプール支局については３月３１日をもって、支局機能を停止することとなり、当社の担う海外拠点は３つとなりましたが、今後も引き続きＦＮＮにおける海外戦略態勢の中で、責務をしっかりと担っていきます。

（５）　スポーツ部門の取り組み

スポーツ局では２００９年度もより良質な番組を制作・放送することでスポーツ文化の発展に寄与できるように、また特に関西に縁のあるスポーツ選手をとりあげて、より地元のスポーツ文化の発展に貢献できるように努力しました。

またさらに一層視聴者の方々に信頼していただくべく、スポーツの持つ華やかな面、またその裏に隠れた選手たちの努力、情熱、苦しみや、これまで知られていなかった事実などを伝えていくことで視聴者の方々にスポーツ選手の真の姿、そしてスポーツのもつ夢や楽しみ、勝負のアヤや醍醐味などを感じてもらえる番組制作を目指しました。主なものを順に記します。

１）野球関連

阪神タイガース、オリックス・バファローズのホームゲームやアウェイの試合を多数放送しました。１０月４日の甲子園での最終戦を含め中継番組数はあわせて２５本にのぼりました。これらの中継放送により視聴者の方々に選手の活躍、喜び、苦しみを伝えていくことが出来たかと思います。特に５月４日の阪神―巨人戦は関西の視聴率が２０．５％をマークし、２００９年度の野球中継の関西地区最高視聴率を記録しました。

そして、１０月１０日（土）には「２００９年プロ野球総決算　シーズン反省会＆クライマックスシリーズ大予想ＳＰ！」を放送。シーズン初めの解説者たちの順位予想を振り返って、実際の順位との相違などを紹介し、各出演者の意見などを面白く紹介、そ

のうえでセ・パのクライマックスシリーズの勝負の予想を紹介し、ファンの興味を高揚させるように努めました。

また、１２月３１日には「２００９プロ野球大忘年会ＳＰ！＆関西駅伝Ｎｏ．１決定戦」を放送し、シーズンをすべて振り返り、阪神・金本知憲選手と打撃コーチとして阪神タイガースに復帰した片岡篤史氏とのトークや野村克也氏のとある日常生活などを紹介したり、関西にあるスポーツチームの面々が駅伝を競って、普段とは違う側面を紹介し、視聴者に楽しんでもらいました。

２０１０年に入ってからも、１月９日には「ボク達同級生！プロ野球４０年会 vs４８年会」を放送し、プロ野球界の昭和４０年生まれと４８年生まれの選手やＯＢらが繰り広げる爆笑対決を紹介するとともに、吉田えり選手も特別参加して視聴者の方々に出演者のいろいろな側面を楽しんでもらいました。

また、２月２７、２８の両日、高知県での阪神―オリックス（安芸市営球場）、オリックス―阪神（春野球場）オープン戦を中継放送しました。２８日の放送はチリ大地震の津波の影響によるＦＮＮ報道特別番組が入り、深夜の放送となりましたが、シーズンに入る前の両チームの仕上がり状況や戦力を紹介することができ、野球ファンに喜んでいただけたと思います。

そして年度末に近い３月２３日には「ナックル姫　吉田えり１８歳の挑戦」を制作、放送、１８歳の吉田えり選手がアメリカに渡り、独立リーグのアリゾナウインターリーグに参加、ボストンレッドソックスのウエィクフィールド投手からナックルボールのコーチを受けるなどのシーンを紹介しました。

２０１０年４月２３日からスタートした女子のプロ野球が話題になっていますが、いち早く先駆者の吉田えり選手を取材し、女子のプロ野球の紹介もでき、野球ファンに新たな興味を呼び起こせたと思います。

２）競馬関連

４月の桜花賞、５月の天皇賞、６月の宝塚記念、１０月は秋華賞、菊花賞、１１月にはエリザベス女王杯などＧ－Ⅰレースを中心とした「ドリーム競馬」のレギュラー番組に加えて、土曜日の深夜帯での競馬の予想を中心にした「サタうま！」は、月１回の企画に対しての有料メール会員が着実に増えるなど人気が上昇しています。両番組ともに競馬ファンの視聴者に楽しんでもらえたものと思います。

また１０月にはドリーム競馬のスペシャル版として「第８８回凱旋門賞完全中継」を敢行し、競馬ファンの方々に世界Ｎｏ．１ステージの競馬を紹介しました。

１２月２８日には毎年恒例の明石家さんまと杉本清の「さんま清の夢競馬」を放送、２００９年の競馬を振り返って総括するとともに、1月９日には２００９年のＧ－Ⅰレース集を放送しました。

そして１月には１８年間続いた「ドリーム競馬」を一新、「競馬ｂｅａｔ」としてリ

ニューアルしました。スタジオの出演者も総入れ替えで生まれ変わり、競馬の新しいファン層の開拓に寄与できるように努めました。

３）単発番組関連

・ゴルフ

５月に中継放送しました「２００９三菱ダイヤモンドカップゴルフトーナメント」ではプロ入り１７年目の兼本貴司選手がＢ．ジョーンズ選手とのプレーオフの末、初優勝を飾るという展開となりました。苦労を重ねたプロゴルファーの技術、精神力、そして努力が実って優勝したという喜びをありのままに映し、見る人たちにも感動を覚えてもらうことができたと思います。

・サッカー

７月にサッカー中継の数が少なくなった中で、ナビスコカップの決勝、万博競技場でのガンバ大阪と横浜Ｆマリノスの対戦を放送し、サッカーファンの方々に楽しんでもらえたものと思います。

・陸上競技

１１月には「神戸女子全日本ハーフマラソン」を録画中継し、恒例になったこのレースを２００９年も紹介しました。

そして１月には、第２９回目を迎えた大阪国際女子マラソンを生中継しました。

大阪の冬の顔となったこの大会では、今年優勝を期待された赤羽有紀子選手らの激走を伝えました。赤羽選手は足の故障が影響して途中リタイアとなってしまいましたが、この大会１０回目の出場となる小幡佳代子選手とルーマニアのリディア・シモン選手の活躍や、初マラソンの選手らのがんばりも余すところなく伝えました。

・セパタクロー

１１月には、あまり一般には知られていない“セパタクロー”という種目を取り上げ日本代表選手の試合を当社のアリーナで開催し、番組収録・放送をし、マイナーなスポーツを紹介することで馴染みのない種目への関心も喚起するように努めました。

・アメリカンフットボール

１２月２１日には社会人のアメリカンフットボール「Ｊａｐａｎ Ｘボウル」を録画中継し、鹿島と富士通の決勝の興奮を届けることができたと思います。

・春の高校バレー

２月６日から２１日まで近畿２府４県の男子・女子高校バレーの地区予選決勝を録画放送し、高校生バレーボーラーたちの活躍、感動を伝えられたと思います。また、この全国大会に先立ち「春の高校バレー・コーチィングキャラバン」企画を今年も制作、放送しました。

「葛藤の先に～金光大阪高校バレー部　探し続けた勝利の方程式」と題し、元全日本代表の佐伯美香さんをコーチに招いて、金光大阪女子バレーボール部の部員たちが近畿

地区予選大阪大会の決勝に向かうべく頑張る姿のドキュメンタリーに仕上げました。
　残念ながら金光大阪は決勝にまで進むことはできませんでしたが、テレビカメラの取材を受け放送を見た部員たちには、貴重な一生の思い出として心に刻まれたことと思います。
・総合
　８月２２日　１５時から７５分番組で「陣スポ！関西超スゴ・アスリート１０連発！」を放送しました。
　関西に馴染みや縁のあるスポーツ選手を１０人取り上げて、世界レベルにある技術や独自のスポーツ観を紹介することにより、関西のスポーツ界の力を認識してもらい、見ている方々にも地元のスポーツ界を再認識していただく機会となりました。
　また３月１３日（土）には、この番組の第２弾として「陣スポ！２　関西が誇る日本一〇〇なアスリートＳＰ」と題し、さらに１０人のアスリートを紹介し、そのパワーやテクニック、パフォーマンスの高さなどを紹介しました。野球やサッカーなどの他に女子重量挙げや子供のテコンドーなど、普段あまり馴染みのない種目にもスポットを当て、各競技をより身近に感じてもらうことができたと思います。
　１０月１２日の体育の日に“科学”をテーマにしたＳ―コンセプトをスポーツ部で担当し、幼稚園児や小学生の体力の低下をテーマに取り上げ、子供たちの運動能力を向上させる取り組みをしているドイツや日本の幼稚園などを紹介しました。そして、日本の将来を背負う子供たちの体力向上を目指し、問題提起を行いました。
　１月１７日には、「激白！スポーツ名勝負のナゾ　石川遼からカール・ルイスまで」と題して全国ネットで放送し、スポーツ界の名勝負に隠されたこれまで知られていない事実を紹介しました。特に陸上のスーパースター、カール・ルイスとベン・ジョンソンのドーピングにまつわる２人の因縁の勝負を振り返り、ベンのインタビューＶＴＲをカールに見せ、メッセージのやりとりを実現させるという世界で初めての試みを実現させました。
　また、柔道の谷亮子選手が敗戦となった試合の知られざる事実を紹介するなど、スポーツファンはもちろん視聴者にとっては興味の尽きないシーンを紹介できました。
・スポーツドキュメンタリー
　３月８日に「高橋大輔　銅メダルへの軌跡～知られざる４年間の道～」と題して、フィギュア競技で８位に終わったイタリア・トリノでの冬季五輪からバンクーバー冬季五輪で銅メダルを射止めた高橋大輔選手の４年間の道のりを取材し、放送しました。
　膝の大怪我を乗り越えて、精神的な成長も成し遂げ、世界選手権では金メダルも獲得した高橋選手をタイムリーに放送することができました。フィギュアファンのみならず、視聴者の皆様には、大いに感動してもらえたものと思います。

　以上のように２００９年度も、より良質でより親しみを感じてもらえるように、また

関西に密着した番組を制作することにより、より地元の視聴者にスポーツでの活性感を得てもらおうとがんばってきました。

もちろん番組の制作のチェック体制もより一層の徹底を図ってきました。部員一人一人の自覚、放送倫理に対する意識が大切であるという認識をより徹底させていくために、毎週１回のデスク会や月１回の局会を欠かさず行い、管理職とプロデューサー、また番組のスタッフが意見・情報の交換を行い、番組制作の進行状況などを説明して、問題点がないかどうかのチェックとさらなる問題意識の向上を目指しました。

またこれまで同様、どうすれば番組がより良くなっていくかの議論を絶え間なく行うよう心がけました。

２０１０年度もこれらの意識をさらに細心の注意を払って高めていき、より以上にスポーツ文化の発展に役立てる番組を制作、放送するように努めていきます。

（６）メディア戦略部門の取り組み

２００９年６月の機構改革により、従来のクロスメディア事業局のうちインターネットやワンセグ等を中心とした分野と、他局に属していたナレッジキャピタル推進部門が、新たにメディア戦略局として業務をスタートしております。

そのような状況下、携帯電話関連事業では、携帯会員のサービス向上を目指して番組ＤＶＤやノベルティなどをプレゼントする企画を「白い春」、「恋して悪魔」の火曜ドラマやローカル番組で実施、出演者による番組内告知が奏功して視聴者からの支持を得た結果、携帯会員増に繋がりました。また、サービス向上を目指して「にじいろジーン」ジーンちゃん絵文字配信や「グータンヌーボ」メルマガ限定プレゼントなどを実施しました。

さらに３月には「ケータイＤＥカンテーレ」のサイト構成を全面的に見直し、直感的にユーザーが見たい「おすすめ」、「番組」、「情報コンテンツ」、「プレゼント」を並列のタグで操作できるようにリニューアルするとともに、準備を進めていた携帯着せ替えサービスサイト、「キセカエＤＥカンテーレ」を３月１日からＮＴＴドコモにて配信を開始しました。

また、動画配信では業界初となる全国ネット生番組の見逃し動画「Ｒ－１ぐんらぷり２０１０」を２月２７日からサービスを開始し、３月末以降、過去に放送された２００２年～２００９年の「Ｒ－１ぐらんぷり・アーカイブ」を順次配信開始しました。

データ放送の分野では、２０１０年の正月特番と連動した「福袋ｄｅカンテーレ」企画を実施し、対象番組でのプレゼント告知などを行ないました。そして１月３１日放送の第２９回大阪国際女子マラソンでは瀬古利彦氏によるデータ放送のみの特別解説を実施し、好評を得ました。

一方、デジタルアートのクリエイターを発掘するイベント「ＢＡＣＡ－ＪＡ」は１０月２８日に発表会を実施しました。本選よりも参加基準を緩和し、将来の「ＢＡＣＡ－ＪＡ」参加を促す「子ＢＡＣＡ－ＪＡナイト」を１２月１１日、大阪市内のアートカフェで実施しました。

さらに、ニューメディアを使ったアート作品の展示プロデュースや、インターネットを利用した実験的アート作品のコンテストプロデュースなどの取り組みを発信する「ＫＴＶ ＮＥＷ ＭＥＤＩＡ ＬＡＢ」のサイトを立ち上げました。

また、メディアアート関連では、ナレッジキャピタル推進部が中心となり、市民（視聴者の皆様）へ向けたイベント等の展開を以下のように行いました。

・トランスフォーマーまつり（６月１４日）

パラマウントピクチャーズからの依頼による映画「トランスフォーマー　リベンジ」のプロモーションイベントをアトリウムと天神橋筋商店街で実施しました。関西の芸術系大学（京都造形芸術大学・大阪芸術大学・神戸芸術工科大学）の協力を得て、世界的に流行していた「トランスフォーマーのコスプレ大会」を展開し、キッズプラザに来ていた子供たちやファミリーなどに楽しんで頂けたと同時に、参加した学生たちに作品発表の場を提供、また、天神橋筋商店街の活性化にも協力できました。

・ロボットショールーム（８月３日～９日）

大阪市などが主催する「ロボットショールーム」をアトリウムに誘致しました。大阪が世界に誇るロボットの数々を一堂に展示し、来場者に見て・触れて体験出来る楽しみを提供するとともに、大阪のロボット技術水準の高さを認識してもらえる良い機会を当社がコーディネートできました。

・夏休みキッズみんぱく（８月２２日～３０日）

国立民族学博物館からの依頼により、特別展のプロモーションイベントを当社のアトリウムで展開、メディアアートの手法を駆使して「カナダ先住民の世界」を子供たちにも分かりやすく、親しみを持ってもらえるよう演出しました。夏休みで賑わっていたキッズプラザ来場者からも多くの子供たちに見てもらい、体験・参加型のインタラクティブ展示を十二分に楽しんで頂けました。

・「メディアアート」の魅力を番組で紹介（１１月７日）

当社は２００７年より、「メディアアート」界の世界最高峰であるオーストリア・リンツ市の「アルスエレクトロニカ」（以下、ＡＲＥ）と業務提携しています。２００９年に３０周年を迎えたＡＲＥと、そこに展示されている様々な「メディアアート」作品を取材・撮影するとともに、当社が「メディアアート」に関連した展示施設運営で参画を予定している梅田北ヤードのナレッジキャピタル計画の紹介を含んだ番組「ヨーロッパ“最先端アート”への旅」を地上波とＢＳフジで放送し、最先端の技術とアートを融合した「メディアアート」の魅力を紹介しまし

た。

メディア戦略局では、２００９年度において、これまで記載しましたようなインターネット事業等の実施に関する社内規程の整備をはかるとともに、様々な権利関係を適切に処理し、契約書などの作成も関連各部署との緊密な協議を重ねて遺漏のないチェックをおこなっております。

またＷＥＢ、携帯を通じて取得する個人情報の管理については、各担当者が適切に管理できるようなシステムを導入しており、アクセスされる方々の安全を第一に考え業務を行っており、今後も引続きこのような態勢で、真摯にメディアの可能性を拡げていきたいと考えております。

（７）　ライツ関連部門の取り組み

６月の機構改革により、クロスメディア事業局の業務のうち映画、ＤＶＤやライツ関連事業を中心とした分野を担うライツ開発局が設置されました。地上波放送と関連する様々な他媒体との相乗効果等をめざして、視聴者の皆様により充実したコンテンツを多様な方法でお届けしており、２００９年度におきましても、以下のような事業を行ってきました。

１）映画事業（当社出資作品）

・「南極料理人」

地球でいちばん寒い場所に、究極の単身赴任 ── 南極観測隊の料理人を務めることになった海上保安官・西村淳氏が体験を綴った著書を映画化、切なくて結構面白い男ばかりの日常を追いかけたハートウォームコメディーです。

２０１０年４月の第１回「日本シアタースタッフ映画祭」では、主演の堺雅人さんと沖田修一監督（主演男優賞／監督賞）がダブル受賞を果たしました。

出演：堺雅人　生瀬勝久ほか　　公開：８月８日

・「ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない」

高校中退でニートのマ男はプログラマーの資格を取得、小さなＩＴ企業に何とか就職する。しかしそこは想像を絶する「ブラック会社」だった ── ！　２ちゃんねるの書き込みから生まれた実話を書籍化・映画化した話題作です。

出演：小池徹平　品川祐 ほか　　公開：１１月２１日

・「サヨナライツカ」

女優・中山美穂１２年ぶりの主演映画となる本作は、原作が中山の夫君でもある辻仁成、監督を「私の頭の中の消しゴム」のイ・ジェハン（韓国）が務める豪華版で、恵ま

れた人生を送り、理想的な婚約者がいるにもかかわらず、自由で刺激的な生き方を象徴する謎の女と出会ってしまった好青年・豊は ── 生涯あらゆる場面でだれもが遭遇する「選択」の意味を問いかける、究極のラブストーリーです。

出演：中山美穂　西嶋秀俊　石田ゆり子 ほか　　公開：１月２３日

（フジテレビ、ＦＮＳ系列出資作品）

・「アマルフィ 女神の報酬」

・「のだめカンタービレ 最終楽章（前編）」

・「ライアーゲーム ザ・ファイナルステージ」

２）レギュラー・単発番組等

・「ＶＩＤＥＧＲＡＪＩＮ（ビデグラジン）」

ライツ開発局ではバラエティー、ドラマ、スポーツ、記録映像など数多くのＤＶＤソフトを企画製作・発売しています。当社発のＤＶＤソフトの魅力を視聴者にお伝えし、もっとよく知ってもらおうと、この番組を制作しました。７月から３月まで、毎週水曜日深夜に放送しました。

２００９年・２０１０年の「Ｒ－１ぐらんぷり」で２年連続準決勝進出を果たし、海外公演にも挑戦するなどいま話題のピン芸人・ナオユキさんが番組の進行を担当、部屋で一緒にＤＶＤを観賞しているかのような独特の空気感で、視聴者の皆様の好評を博しました。

・アニメ「くるねこ」（シーズン１）

名古屋在住のブログ作家・くるねこ大和さんの愛猫たちとの毎日を描いたブログ「くるねこ」が、人気ブログランキング・イラスト部門の１位に。それがコミック本化され大ヒット ──。

ユニークな経緯で誕生したこの作品の魅力をさらに広く伝えようと、当社・角川映画・東海テレビなどが業種を越えて制作委員会を形成、動画作品として完成させたのがアニメ「くるねこ」で、現在当社と東海テレビにて放送中です。

また、放送されたアニメに特典映像などを加えたＤＶＤ版「くるねこ」も発売開始、１２月、３月とすでに２巻が出ており、以降３ヵ月ごとに発売予定です。

さらに、可愛い猫たちが魅力の「くるねこ」からはぬいぐるみや小物類など多数の関連キャラクター商品も誕生しヒット中で、皆様のご好評をいただいております。

・ドラマシリーズ「ＮＥＸＴ（ネクスト）」

次の世代を担う４人の女優にスポットをあて、ご紹介していくドラマシリーズで、４月から６月まで、毎週木曜日深夜に放送しました。主演は岡本杏理、恒吉梨絵、前田典子、清水由紀の４人で、１週目はドラマに先立ち女優たちの素顔に迫り、続いて２回にわたりドラマをお届けするというシリーズ構成で、１０月にＤＶＤも発売開始しました。

・ドラマシリーズ「ＤＲＡＭＡＤＡ－Ｊ」

２００８年度に制作・放送した「ＤＲＡＭＡＴＩＣ－Ｊ」に続き、関西ジャニーズＪｒ.の魅力をお届けするドラマシリーズ第２弾で、7 月から９月の毎週木曜日深夜に放送し、関西地区限定の青春ファンタジードラマとしてご好評をいただき、２月にＤＶＤも発売開始しました。

・番組「ＧＮＬ（ギャル・ネクスト・ラボ)」

新しい情報、新しいテレビの楽しみ方を視聴者に提案する試みとして制作しました。登場するのは藤田志穂・益若つばさら、いまマスコミなどで話題の「ギャル」たちで彼女らのライフスタイルをＶＴＲでリポートしながら、視聴者には同時に、彼女らが自分のアイデアで開発した番組だけのオリジナル商品を購入してもらうこともできるという企画です。

ＫＴＶオンラインモール等を通じて、扇子・ガウン・化粧ポーチ・携帯充電器「パワレボ」・ストーンブレスの５アイテムを販売し、広くご好評をいただきました。

３）ドラマ「リアル・クローズ」での「オンエアリンク」の試み

１０月から１２月に放送された火曜日２２時枠ドラマ「リアル・クローズ」（出演・香里奈 黒木瞳 ほか）で、番組に関連するファッション情報を放送と同時進行で視聴者の皆様に提供し、さらに出演者着用の衣装をＰＣや携帯を使いオンラインで購入できるシステム「オンエアリンク」を実施しました。

ドラマでは、百貨店の婦人服売り場を舞台に、最先端のファッションを扱う世界で生きる主人公の成長ぶりを描きました。今回の企画は、ＰＣや携帯といったテレビとは別のメディアとの相乗効果で、ファッションやドラマの世界に視聴者により興味を持っていただき、ブームアップしようと意図したものです。

番組の放送は１０月１３日から１２月２２日の全１１回で、「オンエアリンク」には計１５社２６ブランドが参加し、毎回４０アイテム前後のファッション情報を提供しました。オンライン情報ページへのアクセスはドラマ放送中から放送直後にかけ毎分５０００～１００００ｐｖ.以上、最多時で１分あたり２００００ｐｖ.を超えるなど視聴者の皆様の関心の高さを示し、当初の企画意図を実現することができました。

４）ＤＶＤ（ブルーレイ）の製作・発売

２００９年度は合計４６タイトルのＤＶＤ（一部はブルーレイ）を製作・発売し、過去最多のタイトル数となりました。当社制作のドラマでは、「トライアングル」「白い春」「恋して悪魔 ～ヴァンパイア☆ボーイ～」「リアル・クローズ」のレギュラー全国ネットドラマをはじめ、「ハンサム★スーツ ＴＨＥ ＴＶ」「サムライ転校生」「ＮＥＸＴ」「ＤＲＡＭＡＤＡ－Ｊ 未来はボクらの手の中に」「ＤＲＡＭＡＤＡ－Ｊ そこにいるボギー」「ＤＲＡＭＡＤＡ－Ｊ 望月ＶＯＧＥＴＳＵ」「ＤＲＡＭＡＤＡ－Ｊ いつかの友情部、夏。」などがＤＶＤ化されました。

また、ドキュメンタリー作品では「類人猿ボノボの棲む森で」「天のゆりかご～世界の屋根パミールに生きる～」の２作を、スポーツでは「不滅の歴史 甦る！阪急ブレーブス～オリックス・ブルーウェーブ」「ターフの魔術師・武邦彦～華麗なる競馬人生５０年～」「猛虎の魂２００９～阪神タイガース苦闘の中の道標～」「吉田えり１７歳 職業・プロ野球選手」「遠藤保仁 ヤットスタイル」「中央競馬Ｇ１レース２００９総集編」を、さらにバラエティー、その他では「１１人いる！」「京都・祇園祭」「ヨーロッパ企画の町内会ディスコ」「ガガガと響く神戸の街～コザック前田＆ガガガＳＰ復活ドキュメント」「よ～いドン！ Ｐｒｅｓｅｎｔｓ 矢野・兵動の懐かしいモノ見学」①②「ＢＡＮＡＮＡ ＦＩＳＨ」「パミール高原 葱嶺（そうれい）」（ブルーレイ作品）「みうらじゅん いとうせいこうＴＶ見仏記」⑪～⑬「京都・町歩き＜洛北＞」「京都四季百景」（ブルーレイ作品）「昭和の街を走った市電シリーズ」①京都市電 ②大阪・神戸市電「ルー大柴の藪からスティックそば屋」「哀川翔 俺たちのキャンプ～実録！死ぬ気で遊ぶ２泊３日～」「京都・町歩き＜洛南＞」「くるねこ」①「紗綾プライベートジャーニーin 北海道～紗綾と遊ぶ夏休み⑴ドキドキ温泉編～」「Ｒ－１ぐらんぷり２００９」「自転車野郎 大阪⇒東京激走録～団長安田が挑んだ２Ｄａｙｓ５５０キロ～」「紗綾プライベートジャーニーｉｎ北海道～紗綾と遊ぶ夏休み⑵ドキドキふれあい編～」「彼女の部屋ＲＲＯＯＭ１・ＲＯＯＭ２」「くるねこ」②「紗綾プライベートジャーニーin 北海道～紗綾と遊ぶ夏休み⑶ドキドキ体験編～」以上の作品を製作販売しました。

５）書籍・ＣＤ・グッズ事業

書籍の分野では、「ドラマ『トライアングル』ノベライズ本」「グータン・ヌーボ 女のセキララ名言集ＬＯＶＥ」を、ＣＤ製作では、音楽情報番組「ミュージャック」司会者・杉本有美さんのデビューＣＤ「ハルコイ」をＤＶＤつきの「蝶タイプ」と写真集つきの「花タイプ」で発売し、ビビアン・スーさんが歌う、アニメ「くるねこ」の主題歌ＣＤ「Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ Ｄａｙ」を発売しました。

また、グッズ事業として、当社の各番組関連グッズ製作・発売のほか、２００３年以来協力関係にある劇団四季の「美女と野獣」京都公演において「美女と野獣グッズ」を販売継続中です。

以上記しました当社の映画出資・ライツ開発各分野においては、著作権その他権利関係を適切に処理し、契約書等の文書作成は担当者がライツ業務部・編成制作業務部・コンプライアンス推進部法務担当ならびに社内弁護士と緊密な協議を重ね遺漏のないチェックを行っております。

また映画・ＤＶＤ・書籍・グッズ各事業について社内規程を見直し、７月以降一部改正を行い、映画事業では社内合意についての新たな基準を設けるなど、より厳正な規程に基づき業務に取り組んでおります。

（８）　技術部門の取り組み

１）デジタル化への取り組みについて

・放送システム・デジタルマスター更新について

放送局の心臓部であるマスターの放送システムの更新が無事完了しました。７月１３日の放送終了後、新システムに切替え、１４日からは、新放送システムで放送を開始しています。この３０年間に実施したマスター更新及び地上デジタル放送対応による大規模マスター改修の中で、最もスムーズに切替りました。今回更新したシステムは、ＨＤをベースとしたシステムで、アナログ放送などアナログ信号を必要とする部分は、大半がＨＤ信号をダウンコンバートしたもので対応するデジタル放送に軸足を移した完全ＨＤの放送システムです。さらに、２０１１年７月に予定されています完全地上デジタル放送への移行のため、アナログ終了告知などきめ細かくアナログ終了対策に対応できるシステムとなっています。また、放送システム更新と合わせて、編成系、営業系、放送系の情報処理の中心となる営放システムの更新も実施しました。系列標準の営放システムの採用と当社仕様へのカスタマイズにより、安全性や操作性が向上するとともに、ＦＮＳ系列の編成系、放送系の情報連携機能強化に貢献しました。

・デジタル中継局置局について

２００９年度もデジタル放送エリア拡大のため、中継局を建設しました。兵庫県では２２局（中継局：８局　ミニサテ：１４局）、京都府では２局（ミニサテ：２局）、大阪府では４局（中継局：３局　ミニサテ：１局）、滋賀県では５局（中継局：２局　ミニサテ：３局）、奈良県では２局（ミニサテ：２局）、和歌山県では１５局（中継局：６局ミニサテ：９局）の合計５０局を置局致しました。これにより当期までに合計９８局の中継局を建設しました。この結果、近畿地区のデジタル放送の受信可能世帯は約７９１万世帯となり、エリアカバー率は約９５．９％となりました。

２）放送事故防止対策、安心安全対策への取組みについて

・マスター設備での取組みについて

７月１４日の放送システムの切替後、それまで使用していたアドオンマスターのデジタル部分を利用して、第３系マスターを構築しました。第３系マスターは、現用・予備システムのバックアップとして、放送事故防止にも寄与していますが、複雑な放送運行のシミュレーションや放送部員のスキルアップのためのトレーニングに放送終了を待つことなく、昼間の時間帯での実施に活用しています。また、放送システムの改修工事や新システム導入時の結合テストなども放送中の実施が可能となりました。

放送部員のスキルアップのため、現在、第３系マスターを使用した放送運行の検証作業やトレーニングを勤務として取りいれていますが、今後は、新放送システムのマニュアル類の充実や２４時間体制の保守契約締結で、放送のさらなる安全性の確保に努めて

いきます。
・生駒送信所での取組みについて
　生駒送信所には６６００Ｖの高圧電源があり、月に一度の目視点検を行っています。そのため、送信所内での事故防止のために全部員は関西電気安全協会の安全衛生教育を受けています。また、送信所には高圧作業用のゴム手袋やヘルメット、検電気を常備し安全対策に取り組んでいま
す。
・視聴者の皆様へのサービス向上
　９月、関西空港のカメラを「フルオート２４時間稼動収録カメラ」に更新。視聴者の皆様への天気や災害情報のサービス向上を図りました。
　さらに２月に午後のニュース（１４時０５分）でリアルタイム字幕放送を開始し、ニュース原稿を自動的に字幕として送出するシステムを構築、稼動させました。なお本システムとの結合テストでは、マスター第３系システムを使用して、実際に字幕対応するニュース番組でシミュレーションを行ったため、テスト期間も短く、安全でスムーズな導入が図れました。

３）ＣＭ運行での取り組みについて
　テレビコマーシャルは消費者の商品選択の大きな機会を提供しています。クライアントからのメッセージを正確に視聴者に伝えることが重要です。キャンペーン期間や商品の確認はもちろんのこと、クライアントの指示どおりの放送素材を放送事故のないように、 広告会社からの送られるＣＭ進行表の切り口を変えて重複確認しました。結果、進行表入力ミスによる放送事故はありません。また、ルーティーンの進行表確認作業のマンネリ化を防ぐために適宜、部内異動を行い、全てのスタッフがＣＭ運行データ管理できるように指導し、クライアント側のコンプライアンス対応のための緊急ＣＭ素材変更や、自然災害、事件・事故で急に編成される報道特別番組や緊急番組変更などの対応が、放送事故なく放送できました。
　ＣＭ表現考査は、放送されたＣＭ素材が、視聴者が不利益を被らないように、関係法令に遵守した表現であるか否か、視聴者目線で公序良俗に反していないかを確認しました。ＣＭ表現考査は、＜テレビの常識＞が＜一般常識＞から外れないように自主自律の精神を保持するために厳しく確認しています。
＜ＣＭ運行の放送事故＞や＜ゆるい考査＞で媒体価値を下げないことが、ＣＭ部の大切なＣＳＲ（社会貢献）だと考えています。

４）民放連、学会への取り組み
　１１月「民放技術報告会」にて制作技術局から「ヘリコプター位置情報確認システム」、「小型報道中継車」の２件、放送業務局から「新デジタルマスター」、「新字幕システム・

番組バンクシステム」、「新ＨＤテロップシステム」の３件を発表しました。
　映像情報メディア学会の評議員として、学会活動に参画し、２００９年度の学会事業では専門講習会担当となり、総務省やＮＨＫ、メーカーから講師を招き、「地デジ完全移行に向けて」と題した専門講習会を２月に開催しました。

５）制作技術の取り組みについて

　制作技術局では、社内だけではなく社外に出て番組制作を行う事が頻繁にあります。その際、一般の人や社外団体、またその施設と接することが多く、制作技術局ではこの作業や活動においてコンプライアンス遵守と作業の安全重視を日常的な重点項目としてスタッフに徹底しています。
　同時に高品質な番組制作のため技術力向上や研究・開発にも日頃より取組んでおり、２００９年度は、番組制作分野で特にドラマ制作に力点を置き、スタッフの育成と技術能力向上を目指しました。具体的な取り組みは、以下の通りです。

・恒常的に各種テレビ技術セミナーにできるだけ参加し技術力の向上に努めています。
・技術開発や創意工夫の成果として、報道技術部の「ヘリコプター位置情報確認システム」（報道技術部）が、１１月の「ＦＮＳあんたが大賞」審査で技術部門賞受賞、３月の「映像情報メディア学会放送番組技術賞」でも次点を獲得し、制作技術部の「サラウンド効果音送出システム」も上記「ＦＮＳあんたが大賞」でアイデア部門賞を受賞しました。
・９月から３月にかけて、総務省近畿総通内での“テラヘルツ波（超高周波）利用に関する調査検討会“にメンバーを派遣、新しい技術の知識習得をめざしました。
・制作技術局２名、放送業務局１名が、新たに無線従事者の資格を取得しました。今後も外部スタッフを含めスタッフに対し資格の取得を奨励します。
・１０月、民放連ドラマ部門において、優秀賞を受賞した前年制作の「ありがとうオカン」に制作技術局スタッフが携わりました。
・１０月～１２月放送の全国ネットドラマ「リアル・クローズ」に社員技術スタッフ（カメラ、照明、編集）を派遣し、東京での番組制作に携わりました。
・１月以降、デジタルシネマカメラやデジタルスチルカメラを使った新しい撮影分野への研究、取り組みを始めました。

（９）　営業部門の取り組み

　２００９年度は、戦後最大の景気後退に見舞われた２００８年後半に引き続き、経済環境の悪化による広告宣伝費の削減に歯止めがかからず、前年割れの極めて厳しいセールス環境下に置かれました。特に主要業種である自動車、飲料、電気機器、インフラ系

企業からの落ち込みが激しく、クライアントの固定費回避傾向によりレギュラー番組提供社の脱落が著しい状況で、スタートしました。

そのような中、５月には全国ネットで放送いたしました大型スポーツイベント「三菱ダイヤモンドカップゴルフ　２００９」の運営に社内の他部署とともに携わり、大会は大きく盛り上がり、成功裏に終わりました。このイベントでは例年、国連難民高等弁務官事務所を通じての難民支援や、大会開催地に福祉目的のチャリティ活動を行っており、社会貢献にも寄与しました。

また本社社屋内の子供向け学習施設「キッズプラザ大阪」との相乗効果を考慮し、８月の８日・９日に同施設と隣接するイベントスペース「アトリウム」にて、家族向けの無料イベント「８・８こどもまつり」を協賛スポンサーにサポート頂き実施しました。これは子供たちに最先端のロボット技術を体感してもらうためのイベントで、会期中は高度な制御技術を使った最新の二足歩行ロボットによるショーが人気を集めました。

さらには、国立民族学博物館で開催される特別展のブームアップのため、視覚効果を使ったメディアアートの手法を用い、カナダ原住民の精神世界を体験型の展示で分かり易く伝える試みを、ナレッジキャピタル推進部と取り組みました。

そして迎えた下半期は、ここ数年続いたテレビ広告市場の下降線に、若干歯止めがかかった状況となりました。市場のデフレ傾向は続いているものの、食品・化粧品・インフラ系企業が回復基調で、スポットＣＭセールスにおける牽引役を果たしました。しかし、スポンサーの固定費回避の傾向に変わりはなく、レギュラー番組の提供セールスは引き続き厳しい環境下に置かれています。

このような状況下で、営業局では新しい取り組みとして、ＪＰ（日本郵便）にご提供をいただいて「家族愛」と「手紙文化の良さ」をテーマにした番組「家族愛のぞき見テレビ アリガトウって言ってみた」を企画セールスし、東京と大阪の２地区で年末に放送しました。

また３月には、飲酒運転撲滅キャンペーンライブ「ＬＩＶＥ　ＳＤＤ　２０１０」を関西ローカルの単発番組としてセールスし、放送では臨場感あふれるライブの模様を通して「飲酒運転による悲劇を絶対に起こさない」というメッセージを訴えました。

視聴者サービスイベントとしては既述の「キッズプラザ大阪」に来場される家族に向けて「Ｐａｓｃｏ　ほほえみの森」を３月２９、３０の両日に実施しました。社屋１階のイベントスペース「アトリウム」に最新鋭の３Ｄ投影装置を持ち込み、子供たちが３Ｄの立体ゲームで森の中を探検しながら、美味しそうなパンに出会うという内容です。参加した子供たちにはゲームで獲得したものと同じパンがプレゼントされるため大変好評で、現代の子どもたちに訴求する新しい形の視聴者還元イベントとなりました。

ここまで記しましたように営業部門では、視聴者の皆様に良質な番組やイベントを提供するため、今後も引き続き「関西テレビ倫理・行動憲章」を遵守し、スポンサーから

の広告等の収入により放送事業の基盤を支えることで、放送文化の発展に寄与するべく取り組んで参ります。

（１０）　イベント開催部門の取り組み

２００９年度も事業局では、感動やお楽しみを関西地区を中心とした皆様にお届けするため、ミュージカル、演劇、コンサート等様々なイベントを開催に取り組んできました。

５月には「三菱ダイヤモンドカップゴルフ　２００９」、恒例のメセナイベントとしては、６月に「３０００人の吹奏楽」を開催いたしましたが、「キンダーフェスティバル」は、新型インフルエンザの流行による園児への影響を考え、６月から秋への延期も検討しましたが、１０月頃からの再流行の懸念もあり残念ながら中止の決定に至りました。しかし、２０１０年１月には、予定通り「アマチュアトップコンサート」を開催しました。

そして、７月から１０月にかけては、２００９年度最大のイベントであるシルク・ドゥ・ソレイユ「コルテオ」を大阪・中之島で開催いたしました。特に今回は年齢、性別を問わず幅広い層の方々に楽しんでいただける作品で、これまでのシルク・ド・ソレイユ大阪公演の中で、最高の３６万３７００人の方にご覧いただきました。

さらに７月には、シェークスピアの名作「十二夜」を歌舞伎にした舞台、２月には昨年に引き続き「Ｌｉｖｅｊａｃｋ　Ｓｐｅｃｉａｌ　Ⅱ」を開催し、３月には恒例となりましたスーパーダンスエンタテイメント「ＢＵＲＮ　ＴＨＥ　ＦＬＯＯＲ　ｆｒｏｍ　Ｂｒｏａｄｗａｙ」を大阪・東京・福岡で開催しました。

これからも、新しいジャンルのイベントに積極的にチャレンジしていきたいと考えています。

一方、長年にわたり行っております「ＦＮＳチャリティ活動」につきましては、８月に本社内アトリウムで開催されました「こどもまつり」会場での募金や、３月のＦＮＳチャリティの「韓国ミュージックフェスティバル大阪公演」会場等イベント会場での募金活動を行いました。今後も引き続き活動の場を広げていきたいと思います。

２０１０年度は、１０～１１月に「平成中村座」を開催するなど、様々なイベント開催を予定しておりますが、コンプライアンス面につきましては、これまでのレポートに記しましたように、リスク分担興行催事契約書の締結や、イベントのホームページ・印刷物をチェックする態勢等も、より定着するよう努力していきます。

今後も、問題が発生した場合は、できる限り速やかな対応ができるよう努力していきたいと思います。

（１１）　番組審議会の活動

放送法を典拠とする放送番組審議機関として、「関西テレビ放送番組審議会」の強化について委員会運営改善の具体策を、番組捏造事件の反省と教訓にたち、２００７年に委員会提言として頂戴いたしました。

当社番組審議会委員の任期は、毎年７月から翌年６月であり、今般２００９年７月より第５１期番組審議委員会を下記委員にご就任いただきました。

渡辺武達 委員長（同志社大学社会学部教授）
瀧藤尊照 委員長代行（四天王寺大学教授）
飯塚浩彦 委員（産経新聞社大阪本社編集局長）
井上章一 委員（国際日本文化 研究センター教授）
後藤正治 委員（作家・神戸夙川学院大学教授）
小長谷有紀 委員（国立民俗学博物館教授）
通崎睦美 委員（マリンバ奏者）
平野鷹子 委員（弁護士）
森下俊三 委員（西日本電信電話株式会社取締役相談役）

そして、第５１期番組審議委員会においても、２００７年に頂戴いたしましたご提言に依って、改善策「番組審議会のあり方」を踏まえ、２００９年度上期も、以下の改善点を引き続き実践いたしました。

＜改善策『番組審議会のあり方』＞

①審議対象番組の選定
・審議会（委員長）と審議会事務局が合同で行う
②討議を活性化する
・オブザーバー（制作担当者）をプロデューサー以外にも拡充する
・オブザーバーと委員との質疑応答を随時に（従来は議事の最後）
・担当責任役員も当事者性に基づき発言する
・委員の自由発言（当月議題以外でも）を拡充する
③諸情報の積極的開示と共有
・審議内容を社内外の従前以上に積極開示する
・審議内容への対応諸施策を次回審議会で報告
・視聴者の苦情・抗議、対応状況のより詳細な報告

＜放送倫理会議への伝達＞

また、２００９年度からの新機軸として、上記③「審議内容の社内各制作現場への周知徹底」について、６月より新たに立ち上がりました「放送倫理会議」において、審議内容を速やかに構成員に伝達し、情報と認識の共有化を実践いたしました。

事業者委員からの各々の部署への示達に加え、放送倫理会議でも周知することで、より確実に現場への周知徹底が図られることになります。そして今後とも、番組審議会からの指摘や提言を、より実りある形で 現場周知することに努力していきます。

また 事業者委員には新たに制作技術局長を加え、地上デジタルの完全移行を目前に、課題への事業者側の取り組みについて詳しく説明できる陣容としました。

＜２００９年４月から２０１０年３月の番組審議会審議事績＞

以下に各回の審議対象番組をお示しします。審議概容については、当社ホームページ上に公開しております。

・第５０５回番組審議会　（４月）
　Ｓ－コンセプト 「緊急報告！ ４０００万人の国民病“アレルギー”のヒミツ」
・第５０６回番組審議会　（５月）
　連続ドラマ「白い春」第１話から第４話
・第５０７回番組審議会　（７月）
　ザ・ドキュメント「父の国 母の国 －ある残留孤児の６６年－」
・第５０８回番組審議会　（９月）
　「よ～いドン！」（８月２４日から２８日の１週間放送分）
・第５０９回番組審議会　（１０月　＊台風襲来のためレポートで審議）
　Ｓ-コンセプト「１００キロカロリーショップ ～黄金レシピで健康ＢＯＤＹ～」
・第５１０回番組審議会　（１１月）
　連続ドラマ「リアル・クローズ」
・第５１１回番組審議会　（１月）
　「テレビの素」（第１回、第２回）
・第５１２回番組審議会　（２月）
　震災関連２番組「巨大地震 未知の揺れ」「震災１５年 神戸・御蔵通から」
・第５１３回番組審議会　（３月）
　「冒険チュートリアル」（１月１８日、３月１日放送）

第４　視聴者の方々とのつながりやメディアリテラシー活動

（１）　活性化委員会からオンブズ委員会へ

「関西テレビ活性化委員会」は、２００７年３月に外部調査委員会から設置を提言され、同年７月に正式に設置されたものです。「外部の有識者からなる委員会で、第三者の視点で、番組だけにとどまらず、経営全般に至るまで、当社に対して、広く論評、注意喚起、提言を行う組織」と位置づけられ、淺田敏一委員長以下６名の委員で構成され、２００９年度は４月に第９回の委員会、６月に懇談会が開かれました。

１）第９回委員会（２００９年４月）

２００９年４月の第９回委員会では、当社の１年間の活動をまとめた「コンプライアンス・ＣＳＲレポート（２００８年度）」が社長より提出されました。

レポートには、社内全ての部署から寄せられた、これまでの取り組み等が様々な角度から記されている他、経営機構改革については、執行役員制度を見直し、コンパクトな形の取締役会にするなどの改革を実行したことや、編成制作局やその下部組織としての３センターの設置の状況が記されました。

そして、「リスクマネジメントシステムの段階的構築」や「視聴者とのつながり」そして「開局５０周年関連イベント」、「メディアリテラシー活動」などの項目についてもその状況が報告され、委員会では、このレポートの内容について審議を行いました。

また、この回では「活性化委員会特選賞」の受賞作品が決定し、表彰も行われました。今回の「活性化委員会特選賞」は、活性化委員が前年（２００８年１月から１２月）に放送された当社制作の作品（番組、および番組内企画）について、当社の再生に対して寄与したものを表彰するもので、募集方法ならびに審査の経過は、以下の通りです。

１月上旬	全役員・社員に特選賞について告知、作品の応募受付を開始。
１月　末	応募〆切　応募作品数　のべ２２
２月上旬	社内ＬＡＮを用いて、役員社員による第１次投票を開始
２月中旬	第１次投票〆切　　全社で２００票の投票
	上位５作品を決定　第２次審査へ
３月	活性化委員会全委員が、５作品を審査
４月上旬	各委員の採点を集計

この結果特選賞には、報道番組部が制作した「映像と証言で綴る昭和の記録」（２００８年１１月１７日～２１日 全５回放送）が選ばれました。

委員からは、「放送局ならではの社会への還元に、膨大な映像アーカイブの活用がある。

昭和を振り返る映像は、ややもすれば東京局の素材が使われがち。そうした中、この番組の試みは貴重。ＯＢや関係者へのインタビューも貴重な証言であり、単に素材をつなげる以上の仕事をディレクターはしている。」
「『あるある問題』への責任の取り方としては、ダイレクトな形ではないにせよ放送局らしい社会的責任の果たし方と地域社会への貢献の仕方であろう。昭和の歴史と関西テレビの歴史が映像で示されており、ローカルの視聴者に対して、関西テレビがこれまで報道機関として果たしてきた役割を総括することで、関西テレビの再生に寄与した番組といえる。」などの講評がありました。

さらに５月２７日には、委員会から当社に「コンプライアンス・ＣＳＲレポート（２００８年度)」についての見解をいただきました。

関西テレビ放送株式会社（以下「関西テレビ」という）より２００９年４月１０日付で公表された「コンプライアンス・ＣＳＲレポート（２００８年度)」(以下「レポート」という）について、当委員会は記載内容を仔細に検討した。
２００８年度、関西テレビは（社）日本民間放送連盟へ完全復帰を果たしたことをはじめ、５０周年記念で、全社員挙げて視聴者の皆様への感謝のためにイベントを行ったことなど、地域に根ざし「視聴者とのつながり」を大切にした放送局に向け、地道な努力を続けていると認識している。
また、編成・制作部門をはじめ、報道、スポーツなど番組制作の各部門では、番組の制作に真摯に取り組む姿勢が見られるほか、営業、イベントなどの部門においても、同様の姿勢が窺える。
なお、当委員会は、３カ月の間に視聴者から寄せられた抗議・苦情についても報告を受け、これを検討したが、重大な人権侵害に該当するものは見受けられない。
裁判員制度が始まるなど、報道を取り巻く環境にも大きな変化が起きており、今後きわめて難しい対応・判断を迫られることもあろうが、関西テレビとしては、慎重を期しつつも、報道すべきことは報道し、主張すべきことは主張し、確固たる信念にもとづき報道機関としての姿勢を堅持されたい。
最後に、民間放送各社の経営環境が厳しさを増しているが、今後も良質な番組作りやイベント開催などに努めることを期待している。

この見解を受けまして、当社は以下のコメントを発表しました。

５月２７日、関西テレビ活性化委員会より、２００９年４月１０日付、当社「コンプライアンス・ＣＳＲレポート（２００８年度)」に対する見解を頂戴致しました。これは４月１０日の委員会でのご審議を経てお纏め頂いたものです。

当社の昨年度の取り組みについて活性化委員会の方々には、（社）日本民間放送連盟への完全復帰や視聴者の皆様とのつながりをつくる取り組み、そして、社内各部門の活動につきまして、基本的にご評価を頂いたものと認識しております。

また委員会見解では、裁判員制度の開始など、報道を取り巻く環境変化について言及されておられますが、当社では慎重を期しながらも、これまでと変わらず、確固たる信念にもとづき報道機関としての役割を果たしていく所存です。

さらに、見解で示されておりますように、経営環境がさらに厳しさを増す中にありましても、視聴率偏重に陥ることなく、良質な番組やイベントを制作するべく、役員、社員一同が今後とも鋭意努力を続けてまいります。

２）懇談会（２００９年６月）

６月の懇談会では、活性化委員会が間もなく２年を迎え、委員の任期の満了があることから、今後の委員会のあり方について話し合われました。

委員会の存続につきましては、一部の委員から既に目的は達成されたといった意見が出されましたが、再生委員会答申などでは、オンブズマン機能・内部的自由の保障を中心に活性化委員会設置を提言したもので、常設が前提であると考えられる。ただし、「再発防止策の履行の監視」については、すでに一定の役割を果たしたと言えることから、今後は活動内容を絞った委員会となることが妥当と判断されました。

また、委員構成についても、コンパクトな構成として、機動力を高めることを前提に、６名から３名にすることで合意しました。

これらの懇談会の内容を受け、活性化委員会を発展させた新たな委員会の設置が必要と判断し、委員と協議を重ねた結果、「オンブズ・カンテレ委員会」を設置することになり、７月にその第１回委員会が開催されました。

３）第１回　オンブズ・カンテレ委員会（２００９年７月）

７月３０日、新委員全員の出席によって、第１回の委員会が開かれ、今回の改組に伴う委員会規程の改定案が承認されました。また、委員の互選により、蔵本一也委員が新たに委員長に就任しました。

そして委員会の名称を「オンブズマン機能を重視する」ことと、語呂の良さなどから、「オンブズ・カンテレ委員会」へと変更することになりました。

また委員は、視聴者への人権侵害を審議する機能、そして内部的自由を保障する機能など、これまでの委員会の流れを踏まえたうえで、旧委員のうちから、企業・消費者専門として蔵本委員、法律学者として鈴木委員、メディア・社会学者として難波委員の３委員が、メンバーとして、引続き活動することになりました。

さらに活動内容については、旧委員会の活動内容のうち、以下の項目を引続き行なう

ことを決議しました。
①オンブズマン機能
視聴者情報部集約の意見、批判、苦情などを、吟味・検討し、調査を指示したり、当社に改善策を求めます。放送による人権侵害などの抗議、苦情に関しても、独立した立場で調査・検証し、当社に救済措置などの改善策を求めます。
これまでの委員会で扱っていた視聴者対応連絡会内容に加え、放送倫理会議で扱われた内容を中心に専門家の立場から意見を述べます。
また、取り扱う対象は、当社の放送番組・事業イベントのほか、ＢＰＯなどで扱われた重要事案についても、放送の将来を見据えた委員会独自の視点で話し合います。
②内部的自由（制作者としての良心の確立）の保障について
当社の番組制作に携わる者が、放送番組基準に沿わない、良心に反する業務を命じられた場合など、事実関係を調査し、当社に対し注意喚起・改善などを求めます。
③特選賞について
独自の表彰制度を持つ意味は重要と考え、前向きに良質な番組や事業イベント等の制作を推奨する委員会として、これまでのように、他とは違った視点で表彰します。

４）第２回　オンブズ・カンテレ委員会（２００９年１０月）
第２回の委員会では、委員会規程の改定として、オンブズ委員会独自のメールアドレスを作成し、社内に向け公開・周知をはかり、内部的自由関連の事案について、社員等から直接通知をメールで受け取れるようにするとともに、新たな調査スキームを規程化し、従来から存在するコンプライアンスラインとの並存で、より機能的にするよう改定しました。
また、委員からの質問に基づき、放送内容やスキームを当社側から委員に説明し、討議しました。その中で、新たな試みを行うのは大切といった意見やドラマとして、作品をしっかり作って欲しいなどといった意見、そして、販売する製品についての品質管理等もしっかりやっていかなければならないなどの意見が出されました。

５）第３回　オンブズ・カンテレ委員会（２０１０年１月）
第３回の委員会では、まず特選賞実施要項について話し合われ、今回から対象を放送番組だけでなく、イベントやその他活動に拡げるとしました。それに伴い関連する規程を改定しました。
そして、２００９年１０月から１２月に放送されたドラマ「リアル・クローズ」について、中間のまとめを当社から委員に説明し討議しました。
委員からは、「オンエアリンク」について、有識者からの率直な意見もある中、ファッションを扱ったドラマでのサービスということで、今回行ったことは分かるが、物を売るためにドラマが作られてしまうと、視聴者がそう思うかも知れない。そこをどう考

えるかが重要。
　副次的な物販が視聴者にメインに見られてしまうと　「沢山売れたことが良いことで、そのために…」という風潮にならないことが確認されるべきだ。テレビがそのように見られてしまうと、テレビが自分で自分の首を絞めてしまう。これを今後どう生かすかが大事。などといった意見が出されました。

　活性化委員会が丸２年にわたり、様々な知識・経験に基づく、第三者の視点から当社の番組制作、放送を中心とした事業活動に忌憚の無いご意見をいただく場として、活動していただきました。それは、当社にとって非常に有意義なことでした。
　オンブズ・カンテレ委員会の委員の皆様には、今後も第三者の立場から当社の番組等につきまして的確なご意見やご指導をいただけるよう望んでおります。

（２）　視聴者の皆様からのお問合せ等への対応状況と「月刊カンテレ批評」

１）お問い合わせ等への対応件数

２００９年度における視聴者の皆様からのお問い合わせ等への対応件数（電話・メール・郵便）の詳細については、以下の通りです。

４月　総件数５２５５件（問合せ３８８４件　苦情１０６２件　要望６２６件
感想４５０件　情報提供１６８件　その他１８７件）
５月　総件数６６７５件（問合せ３６５３件　苦情１４５３件　要望６６４件
感想４４０件　情報提供２０４件　その他２６１件）
６月　総件数６４５６件（問合せ４１１４件　苦情９４３件　要望６５０件
感想３４１件　情報提供２０３件　その他２０５件）
７月　総件数６２１１件（問合せ３６９５件　苦情１０６３件　要望７４４件
感想３１３件　情報提供１６２件　その他２３４件）
８月　総件数６２０１件（問合せ３７３３件　苦情１０５４件　要望６３２件
感想３１７件　情報提供１７１件　その他２９４件）
９月　総件数７９４２件（問合せ４０６６件　苦情１６３２件　要望１３２１件
感想４６９件　情報提供１９０件　その他２６４件）
１０月　総件数９５３５件（問合せ５１３４件　苦情９６３件　要望２６９２件
感想３３１件　情報提供１６６件　その他２４９件）
１１月　総件数６１０８件（問合せ３８４１件　苦情７３４件　要望８５７件
感想３０７件　情報提供１４１件　その他２２８件）
１２月　総件数７０９４件（問合せ４７３９件　苦情７７１件　要望７１７件
感想５３１件　情報提供１３１件　その他２０５件）

２０１０年
　１月　総件数６２２０件（問合せ３８５７件　苦情８６４件　要望７４３件
　　感想４２０件　情報提供１５４件　その他１８２件）
　２月　総件数６９０４件（問合せ４０１０件　苦情１０８１件　要望１０７４件
　　感想３９１件　情報提供１５６件　その他１９２件）
　３月　総件数７２７９件（問合せ４５５７件　苦情８４８件　要望１１４３件
　　感想３８０件　情報提供１５１件　その他２００件）

２）頂いたご意見等の主な内容について

【４月】

４日の「たかじん胸いっぱい」の生放送中に、「ＦＮＮ報道特別番組　北朝鮮がミサイル発射の誤報」が急遽入り、番組編成に対しての苦情が７５件ありました。翌日にも「ＦＮＮ報道特別番組　北朝鮮がミサイル発射」が編成され、「クイズ！ヘキサゴンⅡ（再）」の放送有無の問合せが４４件ありました。

９日の「よ～いドン！」“懐かしいモノ見学”の菓子メーカー工場で、キャンディになる前の塊にリポーターがかぶりついたことに対する苦情が１３件ありました。

１４日の「プロ野球中継」“阪神×中日”戦の放送予定でしたが、雨模様の為、放送有無の問合せが２２６件ありました。

２０日の「桑田佳祐の音楽寅さん」で、桑田佳祐さんの追悼番組という演出に、２３件の苦情がありました。

２３日の「とくダネ！」で“ＳＭＡＰ草彅剛容疑者　公然わいせつで逮捕”の速報が入りました。「ＦＮＮスピーク」でも詳細が報道され、草彅さんの今後の出演予定の問合せが入りました。その後、釈放のニュース、謝罪会見の放送が続き、草彅さん関連で１５５件ありました。

４月から「アップ＆ＵＰ！」が始まり、応援やご意見、その他問合せなど１ヶ月で２１１件ありました。

【５月】

４日の「プロ野球中継」“阪神×巨人”戦が放送され、延長されなかったことやＣＭが多いなど、苦情が４４件ありました。

１６日に新型インフルエンザの国内初感染が確認され、「たかじん胸いっぱい」の放送中に「報道特別番組 新型インフル 国内で初めて発生」のニュースが入り、苦情が２２件ありました。また、その後、感染者が関西でも確認され、手洗い・うがい・マスクの着用を呼びかける報道に、マスクの入手方法などの問合せ、「マスクをしながらリポートすると不安を煽る」などの様々なご意見がありました。新型インフルエンザ関連の問合せやご意見、情報提供など１ヶ月で３７３件ありました。

２７日の「グータンヌーボ」に出演予定の韓国のスケート選手に対してのご意見や、「出

演させないように」との抗議があり、合計で３３２件ありました。
２６日の「よ～いドン！」のアナログ放送音声の瞬断が多く発生し、その件についてのお問合せが５３件ありました。
２９日の「ＦＮＮスーパーニュース アンカー」“金曜日のギモン？？「追い出し屋」の実態とは？”に「家賃滞納者を正当化している」などのご意見が１９件ありました。
【６月】
ドラマ「白い春」が２３日に最終回を迎え、様々な感想や再放送希望など、１１６件の電話やメールがありました。
２６日の「緊急特別番組！マイケル・ジャクソンはなぜ死んだのか！？世界が震えた衝撃の全真相」が、フジテレビでは１９時から放送されましたが、当社では１９時５７分からの放送だった為、ご意見が６８件ありました。
【７月】
１１日（土）「プロ野球中継２００９ 阪神×巨人」が放送され、フジテレビで放送された「爆笑レッドカーペット ドキッ！芸人だらけの満点コラボ２時間スペシャル」の放送日時の問合せや「同日に放送して欲しい」などの要望が、４７件ありました。
１５日の「スーパーニュース　アンカー」に出演の男性コメンテーターが、政局に関して熱く語られ、ご意見が７２件ありました。
２０日の「ザ・ドキュメント 希望って、何？～不安社会を生きる若者たち～」に、感想や再放送希望が１４件ありました。
２５日・２６日に「ＦＮＳの日２６時間テレビ２００９ 超笑顔パレード 爆笑！お台場合宿！！」の放送があり、タイムスケジュールの問合せが５０件、「笑っていいとも！増刊号生ＳＰ」の音声が小さいというご意見が１７件あり、合計で１７８件の電話やメールがありました。
【８月】
８日の「たかじん胸いっぱい」“いま、ワルが熱い！元ヤンタレント大集合！！”に、暴走族を美化しているなどの苦情が２４件ありました。
１０日の「アップ＆ＵＰ」“ニュースでヒートＵＰ！酒井法子容疑者供述「夫に勧められ吸引”で笑福亭鶴光さんの下ネタ発言に苦情が３２件ありました。
１０日～１４日の「よ～いドン！」“夏真っ盛りスペシャル！２００９年度上半期のオススメベスト３”のお問合せが、合計で２３２件ありました。
３０日の「ＦＮＮスーパー選挙２００９ 審判の日～どこで誰が、未来を変えるのか？」には出演者へのご意見など、３６件ありました。
３１日に急遽、「ＦＮＮ報道特別番組 歴史的惨敗から一夜、麻生首相記者会見」が編成され、放送休止になったドラマ「海猿（再放送）」のお問合せなどが９２件ありました。
「ぶったま！」が９月末で終了することへの、お問合せや要望などが４６件ありました。
先月からの酒井法子被告の報道に対して、「過熱し過ぎ」などのご意見が５３件ありま

した。
【９月】
６日の「お笑いワイドショー　マルコポロリ！」で、新聞の番組欄に韓国の有名男性ユニットの「舞台裏」と記載され、その映像が無かった事に対して１５３件の苦情がありました。「スーパーニュース　アンカー」と「ぶったま！」で、男性コメンテーターのコメントに対しての苦情が、合わせて８０件近くありました。また、「土曜プレミアム 特別企画 戦場のメロディ」に「感動しました」「再放送してください」などの感想や要望が４０件近くありました。
１６日に新政権の組閣で、ドラマ「ＣＨＡＮＧＥ（再放送）」が休止した事への問合せや苦情が５８件、その後の「スーパーニュース アンカー」“青山のニュースＤＥズバリ！”の放送時刻が変更になり、お問合せや苦情が３６件ありました。
１７日には「ＣＨＡＮＧＥ（再放送）」の中で酒井法子被告の保釈関連の中継がカットインされ、苦情が２１件ありました。「ぶったま！」の番組終了に、阪神タイガース情報や青山さんの“ＮＥＷＳフカヨミ”を楽しみにされていた方より「残念です」「是非リニューアルしてください」など、感想や要望が１５０件ありました。とりわけ９月は「スーパーニュース アンカー」と「ぶったま！」での男性コメンテーターの政局に対する解説に、たくさんのご意見がありました。「偏っている」「民主党批判だ」などの苦情は１ヶ月で「スーパーニュース アンカー」に２４２件、「ぶったま！」に１１３件ありました。
【１０月】
３日には、「ぶったま！」が９月末に終了した事をご存知ない方から、「今日の放送はどうなってるの？」「なんでこんな古いサスペンスドラマしてるの？」「『ぶったま！』みたいな番組をもう一度作ってください」などの、お問合せ、ご意見、要望が７０件あり、１ヵ月で１７６件となりました。
６日から再放送が始まった「白い巨塔」に、放送日時や主題歌などの問合せが１０５件ありました。
３０日の「よ～いドン！」“発見！関西ワーカー”で紹介された瓶詰職人のお店へのお問合せが５２８件ありました。
フジテレビで２３日から放送される「０号室の客」に、放送有無の問合せや放送希望がメールを中心に多く寄せられ、１ヵ月で２００２件ありました。
【１１月】
１日の「 日本シリーズ 北海道日本ハムｖｓ巨人」のスペシャル解説、スペシャルゲストに対するご意見が２１件ありました。
２２日の「フジテレビ開局５０周年特別番組　たけしの日本教育白書」の司会者の発言に対しての苦情が６３件ありました。
２５日に「ロングバケーション」の再放送が始まり、初回９０分で放送されたものが２

日に分けて放送された為、「昨日と同じ内容が放送されてるけど、どういうことですか？」などのお問合せが３８件ありました。
【１２月】
１０日に「ロングバケーション（再放送）」の最終回が２日に分けて放送された為、先月と同様のお問合せが５３件ありました。
１１日に「よ～いドン！」“発見！関西ワーカー”で紹介された 蜂蜜ソムリエのお店のお問合せが１６４件ありました。
１４日の「スーパーニュース　アンカー」男性キャスターの小沢幹事長に対する発言に、ご意見が多く寄せられ、翌日から忌引きでお休みだった為、お問合せ、ご意見、感想などが合わせて１１６件ありました。
１７日の「よ～いドン！」“人気モン見学”で訪れた新潟の真空パックの切り餅「のお取り寄せ電話番号と、繋がらないなどのお電話が９３件ありました。
２６日の「ナンボＤＥなんぼ ２００９年もガッポリ儲けました！２時間半お金の話しかしませんＳＰ」の放送が司会者の男性が逮捕されたことで急遽休止となり、「なぜ放送がないのですか？」「今後の『ナンボＤＥなんぼ』の放送はどうなるのですか？」などのお問合せやご意見などが５１１件ありました。
「フジテレビ開局５０周年記念ドラマ 不毛地帯」の放送が年末年始お休みの為、放送日時のお問合せが１１２件ありました。
【１月】
深夜に連続放送していた「２４-ＴＷＥＮＴＹ　ＦＯＵＲ-」の放送が、１１日以降週１回の放送となった為、お問合せが１０９件ありました。
年末年始の特別番組などで休止している「フジテレビ開局５０周年記念ドラマ　不毛地帯」の放送日時にも、お問合せが９２件ありました。
１６日の「土曜プレミアム 特別企画 阪神・淡路大震災から１５年 神戸新聞の７日間」が放送され、「非常に感動しました」「再放送してください」などの感想や要望がありました。
「スーパーニュース アンカー」“青山のニュースＤＥズバリ！”の放送で、１６日に６９件、１３日は７４件、２０日は１２６件のご意見や要望、お問合わせがありました、また、男性キャスターが体調不良で４日間お休みした為、１５５件のお問合せがありました。
３１日の「第２９回大阪国際女子マラソン」が行われ、６４件の電話やメールがあり、うち放送日時やコース、通過時間、順位などのお問合せが３２件ありました。
【２月】
「スーパーニュース　アンカー」に出演の男性コメンテーターの降板の噂がネット上に拡がり、「降板させないでください」との要望や、「降板させるなら、関西テレビは見ない」などの抗議が、２日には４６２件、３日にも２１１件と、１ヵ月で８１０件の電話

やメールがありました。
４日の「救命病棟２４時（再放送)」の第２話放送中に急遽、「朝青龍会見、引退へ」が１０分弱カットインされました。その為、翌日の５日に再度第２話の放送をしたところ、「昨日と同じ内容ですが？」との問合せが１６４件ありました。
１２日の「よ～いドン！」“発見！関西ワーカー” ビーズアクセサリーデザイナーのお店のお問合せが１２５件ありました。
２３日の「Ｒ－１ぐらんぷり２０１０」には、司会者、審査員（審査方法)、出場者のネタなどに対して３３件のご意見がありました。
２８日のチリ大地震による津波情報の日本地図が画面右下に表示され、警報や注意報が出ている箇所が点滅していることに対する苦情が３０件ありました。
また「ＦＮＮ報道特別番組 日本列島に大津波警報」が放送され、「お笑いワイドショーマルコポロリ！」が休止、「プロ野球中継２０１０オープン戦 オリックス×阪神」が５分のみの放送となった為、苦情が５５件ありました。
【３月】
３日の「ＦＮＮスーパーニュース アンカー」“特集 「がん難民」をなくせ！ りんくうタウンに 治療拠点構想”で紹介された病院のお問合せが１８１件ありました。
８日深夜に放送された「髙橋大輔　銅メダルへの軌跡～知られざる４年間の道～」を見終えて、「素晴らしかったです」「感動しました」などの感想や、ご覧頂けない地域の方々からの放送希望が８０件ありました。
１２日の「よ～いドン！」“発見！関西ワーカー”で紹介されたおはしの工房のお問合せが１３８件ありました。
月曜日から金曜日まで放送のあった「真珠夫人（再放送)」が、１５日から金曜日のみの放送となり、お問合せやご意見が１０９件ありました。
２５日から２８日に「２０１０世界フィギュアスケート選手権」の放送があり、各種目の放送日時のお問合せが３２件、放送予定のない「エキシビション」の放送希望などが５７６件ありました。
「よ～いドン！」“いい宿ほっこり自画自賛温泉”が２９日から４月２日までお休みだった為、「温泉のコーナーはなくなってしまったのですか？」とのお問合せが７２件ありました。
　また、上記対応数の視聴者情報部で受け付けた視聴者の皆様からの問い合わせ、要望、感想、苦情、情報提供等のうち、番組専属の「視聴者対応スタッフ」が担当しました対応件数につきましては、次のようになっています。
「よ～いドン！」３３０件、「スーパーニュースアンカー」（１７時台）６５１件
「ＦＮＮスーパーニュースアンカー」（１８時台）２１５件

３）「月刊カンテレ批評」について

「月刊カンテレ批評」はこれまで自社検証番組として２００９年度末で７２回の放送を行ってきました。当社制作の番組を自ら検証・批評することにより放送倫理を確立する目的で１９９７年４月に「月刊８チャンネル」として放送が開始されました。そして２００４年４月に「月刊カンテレ批評」としてリニューアルし現在に至っています。

番組は、オンブズ･カンテレ委員会の報告などを含めた、当社の情報を公開する目的で「関西テレビからのお知らせ」を番組の冒頭で紹介し、いくつかの「視聴者の声」を取り上げ担当部署から回答するコーナーに加え、番組の演出方法などのあり方について、識者から忌憚の無い意見を話していただく「メディア批評」コーナーを１０月から新設し、番組名にもあります「批評」部分に重きを置いています。そして最後に番組審議会の委員の方々のご意見紹介で締めくくっています。

この番組が、当社の番組やイベントなどを批評することで、より良い番組作り、そして視聴者と心でつながるテレビ局を目指すための一助としての機能を保っています。

（３）　ＡＣＡＰの会員企業として

当社では２００７年度以来、ＡＣＡＰ（消費者関連専門家会議）の会員として活動させていただいており、西日本支部の例会に毎月出席し、消費者でもあります視聴者の方々との結びつきなどを日々調査・研究を行っております。

また、ＡＣＡＰでは例会時に講演を行っており、４月は「やりまっせ夢の実現“まいど衛星”～自社経営に活かす衛星開発～」、６月は、「大手電工会社の消費者啓発の取り組み」と、日本消費者協会会長より「日本消費者協会の活動と消費者庁、ＡＣＡＰへの期待」などのお話を拝聴しました。

さらに、７月は「添加物の安全性と輸入食品監視状況」と、消費者情報ネット理事長より「相談事例から見る最近の消費者事例」、８月の例会では、ＡＣＡＰ研究所所長より「ＡＣＡＰシンポジウム２００９概要と、誤使用防止ＰＪ報告」と、公正取引委員会事務総局　近畿中国四国事務所　総務監理官より「消費者庁開設に向けた公正取引委員会の消費者行政について」９月は、「食と健康」、「取材する側から見た企業の危機管理対応」の講演があり、それぞれのテーマについて理解を深めました。

下半期に入ってからは、１０月に「どう違う？新聞とテレビ！～危機管理広報の基本～」の講演を拝聴しました。１１月は「政権交代と食糧・農業政策について」、１月は「ＯＳＫ日本歌劇団の再生と現況について」２月は「食卓の向こう側に見えるもの～だから食育なんだ～」の講演に参加しました。今後も引き続き活動等を行っていきます。

（４）　メディアリテラシー推進活動の現状

１）活動全般について

２００９年度のメディアリテラシー推進活動につきましては、６月の機構改革と人事異動で、メディアリテラシー推進部を増員し、所管を総務局からコンプライアンス推進局に移すなど、態勢が強化されました。活動の中心であります全社横断の組織“心でつながるプロジェクトチーム”も新メンバーを加え再編成され、新しい活動の基本方針について、改めて議論を重ねました。

基本的にメディアリテラシー推進の活動は、“心でつながるプロジェクトチーム”を中心にした全社員参加型の取り組みであることが確認され、プロジェクトチーム会議の承認で決定し、事務局としてメディアリテラシー推進部が、その具体化についての調整を担当し、プロジェクトチームの会議は毎月１回開催され、メンバーが活動報告や企画提案、情報交換などを行う、活動のバックボーンとなっています。

また同時に、メディアリテラシー番組「テレビの木」（１０月からは「テレビの素」）（毎月１回、通常第３日曜日午前６時３０分放送）の制作も、担当者ごと推進部に移り、番組制作とメディアリテラシーの実践活動を効果的に連携させ、成果を上げるよう窓口が一本化されました。

また、当社ホームページに、プロジェクトチームの活動が掲載されているほか、メディアリテラシーの関連情報の共有をはかるため、社内に発信しているメールマガジン「メディアリテラシー通信」は、２００９年４月から２０１０年３月まで、合わせて１６回発信しました。

さらに活動のシンボルとして、ロゴマークとＴシャツを作成しました。後掲の出前授業などの現場で、スタッフ全員が統一したユニホームを着て、メディアリテラシー活動と当社のつながりをアピールしています。デザインは、サークルの中にあるテレビ画面に躍動するハートが描かれ、その両端には大きく広げた翼がデザインされています。プロジェクトチームの活動が、このマークのように大きく羽ばたいて広がっていければと願っています。

２）出前授業について

当社の活動の基幹となっている「出前授業」は、青少年へのメディアリテラシー教育の一環として行っているもので、次のような活動をしました。

まず、８月８日、９日の両日、夏休みに子供の体験学習を支援するための箕面市主催のイベント“こども体験フェア”に参加しました。

会場に、放送のデジタル化で廃用となったアナログ放送機器を使って作られた可搬型のミニスタジオセットを持ち込み、子供達に自由に触ってもらい、テレビ放送の仕事を実際に体験してもらいました。子供たちは、アナウンサー、キャスター、お天気キャス

ター、カメラマン、スイッチャー、ミキサー、ディレクターなど様々な役割を、社員スタッフのサポートで、楽しみながら疑似体験しました。参加者は２日間で児童５６人、保護者を含めると９７人でした。

また、９月２６日には、堺市の教育文化センター施設“ソフィア堺“でも、同様に子供スタジオを展開し、児童２９人（保護者を含め６０人）を対象に、授業をおこないました。いずれのイベントも、本物のカメラに触れた感動や、ニュース原稿を読むアナウンサーやキャスターの仕事に挑戦した感激などの声が多数寄せられ、子供たちのテレビ放送への関心と親しみが倍増したことと思います。同様の取り組みは、１１月、１月、２月、３月に兵庫県や大阪府の小学校でも行いました。

その他にも、７月には箕面市内の中学校に、女性アナウンサーを派遣し、２年生の総合学習の授業として、アナウンサーの仕事、言葉の表現や話し方について講義しました。

３）制作支援活動について

新たな活動として、「中高生のための映像作品制作支援プログラム」を始めました。今回は、近畿地区の中高生を対象にした軽音楽系クラブのコンテスト「Ｗｅ ａｒｅ Ｓｎｅａｋｅｒ Ａｇｅｓ」（ウイ・アー・スニーカーエイジズ）を舞台に、１２月のグランプリ大会に向けて挑戦する大阪府立柴島高校と近畿大学附属高校の２校のクラブメンバーの姿を、同じクラブの仲間が取材し、ドキュメンタリー作品を制作するという試みです。

７月から１２月までの取材・撮影の後、編集作業を経て３月には近畿大学附属高校の完成試写会を行いました。この体験を通して、ドキュメンタリー作品を制作する「難しさ」と「おもしろさ」を体感してもらえたのではないでしょうか。この活動は、中高生の映像作品制作を支援する過程において、支援に携わった当社スタッフと、作品を制作した生徒との間で、お互いのメディアリテラシーを学習することにつながり、今後も継続していきたいと考えています。

また「大人のためのメディアリテラシー教育」として、４月から３ヵ月間をかけて、大阪市浪速区の木津卸売市場の朝市実行委員会が、ビデオ作品作りに挑戦しました。

この試みは、作品のテーマは自由とし、カメラや編集機材を当社が提供して、企画から撮影、編集、仕上げまですべて、市場の人たちが行うものです。

企画の立て方やカメラ撮影の講習などのトレーニングを経て、委員会で、作品テーマを、「絆　築く　木津市場」（食育や対面販売を推進する市場のモットー）と決め、月に１回開催される「木津の朝市」を取材対象として作品作りを始めました。

数々の試行錯誤を重ねた結果、３分余りのビデオ作品が完成し、８月２３日放送のメディアリテラシー番組「テレビの木」で全編放送されました。そしてスタジオで、制作を担当した市場の人々が、送り手としての現場を体験した楽しさと難しさを語りました。

この体験型の試みは、今後も予定されていて、送り手と受け手の相互理解を深める一

助になればと期待しています。

４）大学等での共同研究や講義について

メディアリテラシーの共同研究も大学生を中心に進めています。２００９年度で２年目を迎えた立命館大学産業社会学部との研究では、４月から新企画でスタートし、「１０年後に関西テレビは生き残れるか？」という大胆な研究テーマを学生達に示し、研究を行いました。

当社に限らず、テレビメディアがこれから何処へ向かうのか？　生き残るために何が必要なのか？　同世代の番組に対する意識の変化や、放送関連の事業も含めた経営の問題にまで研究対象を広げています。

大学での講義では、１回目は会社の概要や沿革、関西ローカルの考え方、放送と通信の融合など議論の前提となる課題を提示、さらに２回目以降、営業からは“テレビ事業のあらたなビジネスモデル”の研究や、編成からは“テレビはこれからも夢と信頼を与えるもの“とそれぞれ現場スタッフの思いが語られました。

そして７月には、上期の研究のまとめとして学内でのアンケート調査（サンプル数１００あまり）が行われ、若者のテレビメディアに対する意識の変化が報告されました。関西ローカル番組の必要性については「関西の文化を大切にしたいから」という意見が添えられていたことが印象的でした。また２月には、代表者６名による成果の発表会が行われ、当社社員らが貴重な意見や提言をもらう機会となりました。

また、関西大学社会学部と進めている「マスコミ制作実習」も４月から毎週、２コマの授業が行われ、長い制作現場キャリアを持つ社員が登壇し、授業を行いました。

学生以外では、研究活動を１５年間続けている岸和田市の市民グループに対して、現地で講義を行ったほか、当社で報道デスクや考査担当者とそれぞれテーブルを囲んで、ニュース報道の判断基準、また考査部の仕事などについて学習し、意見交換をしました。

５）その他の取り組み

プロジェクトチームのユニークな取り組みとして、７月２２日に“皆既日食観測会”を当社で行いました。本社社屋内にある大阪市の児童教育文化施設・キッズプラザ大阪への協力事業として、国内外からの日食映像の配信を行いました。本社のアトリウムやなんでもアリーナを開放して、各地から伝送されてくるハイビジョン映像を大スクリーンで上映しました。

関係団体や各社など様々な技術協力やご支援を得て実現できた企画で、悪天候だった奄美大島と、上海を除いて、各地から送られてきた鮮明な映像が映し出され、美しいダイヤモンドリングに、会場では歓声が上がっていました。

この観測会には、子供らを中心にのべ６００人が集まり、社会貢献の活動に新たなページを開くことができました。

６）メディアリテラシー番組「テレビの木」（１０月から「テレビの素」）

メディアリテラシー活動のもうひとつの柱となっている番組「テレビの素」（通常毎月第３日曜日午前６時３０分から放送）は、レギュラーのメディアリテラシー番組としては、他局に例を見ない番組です。

２００７年１０月にスタートして以来、放送回数２９回、テレビ放送の現場の姿を視聴者にお伝えしてきました。放送の仕組みやスタッフの動き、報道番組やニュース、バラエティやスポーツ番組などを取り上げ、テレビ番組がどのように作られているのかを視聴者の目線に立って、カメラはスタジオの裏の裏まで潜入し、スタッフに密着して見せてきました。

この番組は、「あるある問題」で失われた信頼を取り戻すことを大きな目的としてスタートしましたが、番組制作にあたっては、調整の必要な取材依頼も、各部署で快く引き受けていただき、全社挙げて番組内容の向上にのぞみました。

１０月からは　タイトルを「テレビの素」と改め　司会者も吉本興業のコンビ、ロザンの２人になりました。番組は新しいアプローチで「メディアリテラシー」の広がりと可能性を追求していきたいと考えています。

２００９年度に放送された内容を以下に記します。

「テレビの木」司会：三倉茉奈　佳奈　石巻ゆうすけアナ

４月：「ＡＤ（アシスタントディレクター）の仕事」

テレビコラム　　「正しいテレビの食べ方」

５月：「録画番組が放送されるまで」

テレビコラム　　「景気回復！　今　求められるテレビの役割」

６月：「スポーツニュースの取材記者」

７月：「ニュースの特集コーナー」

８月：「大人のためのメディアリテラシー」

９月：「選挙報道～速報「当確（当選確実)」の仕組み」

「テレビの素」司会：ロザン　杉本なつみアナ

１０月：「ロザンの疑問！ メディアリテラシーＱ＆Ａ」

１１月：「情報バラエティ番組のコーナーＶＴＲのつくり方」

１２月：「市民グループがインタビュー取材に挑戦」

１月：「事件報道」

２月：休止

３月：「アナウンサーの仕事」

（５）　環境対策等、ＣＳＲ活動について

当社では、コンプライアンス態勢等の構築や積極的な企業情報の開示、情報セキュリティポリシーの再構築など、ＣＳＲを常に認識して企業活動を行っておりますが、一昨年に策定した「環（カン）テレ宣言」に則り、環境負荷の少ない社会の実現に貢献する姿勢を明確にし、取組対象の拡大に向け、継続して施策を実践しています。

省エネルギーに対する取り組みとしましては、２００８年度から実施している１０階テラスの屋上緑化計画やゴミの分別収集やリサイクル推進キャンペーンを継続して実施していますが、その他の取り組みとしまして、番組ＣＭダビング室及び放送機械室の照明１８０本を蛍光灯からＬＥＤ灯に変更するなど、社内の一部照明器具をＬＥＤ照明に切り替えたり、社屋ビルのネオンサインの消灯時間を設けたり、またビル内のテナント施設用エスカレーターの停止日を週１日設定するなどエネルギー削減を実践しています。

また、これらの取り組みと並行して、スタジオ照明の運用や照度の見直しを行い消費電力削減に取り組んでいるほか、大幅な省エネが可能な新規照明器具の開発をメーカーと共同で行っており、２０１０年度内に製品化する見込みが立っています。

さらに、省エネルギーの実績の一例としまして、5回目を迎えた「クールビズ」では、９月のエネルギー使用量が２００８年度は前年比で９３％に減少しましたが、２００９年度はそこからさらに９６％まで減少させることができました。

今後も環境負荷の少ない社会の実現に向けて、全社あげて取り組みを継続していきます。

（６）　会見、ホームページ等、企業情報の開示状況

１）放送事業者の責務としての企業情報の開示

放送事業者としての責務を果たすため、当社では２００９年度も社長会見をはじめ、報道リリースやホームページ等で、業績、視聴率状況、番組改編情報等の開示に積極的に努めております。

また、事件・事故等、社会に与える影響が大きいと思われる事項の情報開示も、適時行っております。

２）社長記者会見

５月２９日の決算取締役会後、福井社長が定例記者会見を行い、２００９年３月期の決算概要やコンプライアンス・ＣＳＲレポート等を公表いたしました。

８月６日、１１月１６日、そして２０１０年1月２８日にも、社長が定例記者会見を

行い、各四半期ごとの業績動向や視聴率状況を説明いたしました。
　また、地上デジタル放送への取り組み状況、活性化委員会からオンブズ・カンテレ委員会への移行経緯と内容説明、それにメディアリテラシー活動に関する説明も行ってきました。
　その他、各種媒体への社長個別インタビュー、業界紙への社長会見等も随時実施いたしました。

３）社会的重要事項に関する情報開示
　芸術祭優秀賞をはじめとする番組関連の各賞受賞やデジタルサイネージ実証実験等のイベント情報、ドラマ「リアル・クローズ」におけるオンエアリンクの仕組み、それに個人情報を含んだＵＳＢメモリ紛失の経緯等、社会的重要事項に関する情報も適時開示いたしました。

４）その他の会見、ブリーフィング等
　４月１０日、第９回活性化委員会開催後、その内容をコンプライアンス推進局長が記者ブリーフィングを行いました。

５）ホームページでの情報開示
　当社では、視聴者の皆様をはじめとしたユーザーの方の利便性を考慮し、番組情報、並びに企業情報を速やかにお伝えできるよう心掛けたホームページ制作を実施しております。
　２００９年度に当社ホームページにて開示した企業情報は以下の通りです。

４月　１日（水）　「代表取締役社長　ご挨拶」更新
４月１０日（金）　関西テレビ活性化委員会
　・４月１０日付 コンプライアンス・ＣＳＲレポート（２００８年度）
　・活性化委員会特選賞決定について
４月２４日（金）　関西テレビ活性化委員会
　・第９回委員会概要
５月　１日（金）　ＣＳ放送「関西テレビ☆京都チャンネル」放送終了の件
　会社案内ページ「会社概要」「会社沿革」リニューアル
５月２９日（金）　関西テレビ活性化委員会
　・５月２７日付 コンプライアンス・ＣＳＲレポート（２００８年度）に対する活性化委員会の見解
　・５月２９日付 活性化委員会の見解を受けて
６月　１日（月）　平成２１年３月期決算社長会見（５月２９日）

６月　４日（木）　第４６回ギャラクシー賞　選奨受賞
６月２２日（月）　第６８回定時株主総会及び「役員担務」について
８月　６日（木）　オンブズ・カンテレ委員会 第１回 概要
８月　７日（金）　平成２１年夏季社長記者会見（８月６日）
９月１８日（金）　平成２１年 日本民間放送連盟賞番組部門･テレビドラマ番組優秀賞を受賞！
１０月１６日（金）　オンブズ・カンテレ委員会第２回概要
１１月１２日（木）　関西テレビ放送、アイルド、フィールドメディアネットワークの三社がデジタルサイネージの実証実験を開始
１１月１６日（月）　１１月１６日付コンプライアンス・ＣＳＲレポート（２００９年度上半期）
１１月１７日（火）　平成２１年秋季社長会見（１１月１６日）
１２月　１日（火）　２００９年度関西写真記者協会「テレビ・ニュース映画部門」審査会において、協会賞及び銀賞を受賞
１２月１０日（木）　２０１０年度　第７６期　テレビモニター募集のお知らせ
１２月１４日（月）　「天のゆりかご」アジアテレビ祭審査員推奨を受賞
１２月１８日（金）　「父の国母の国ある残留孤児の６６年」文化庁芸術祭テレビ部門ドキュメンタリーノブ・優秀賞
１２月２５日（金）　携帯サイトで“カンテーレえもじ”配信スタート
１月２９日（金）　平成２２年新春社長記者会見（１月２８日）
２月　５日（金）　個人情報が含まれたＵＳＢメモリーの紛失について
２月２５日（木）　４月スタートドラマ「ジェネラルルージュの凱旋」プレサイトオープン
３月１９日（金）　２年連続、坂田記念ジャーナリズム賞を受賞

６）これからの企業情報開示

企業広報部を事務局に、社長室長、コンプライアンス推進局長、経営管理局長、総務局長、編成制作局長、秘書室長等で構成する「広報委員会」では、今後も社長会見で開示する企業情報に関して検討を続けてまいります。

企業に透明性が求められる今、私たちはこれからも、当事者意識、危機管理意識を強く持ち、放送の公共性とそれに由来する高いレベルのアカウンタビリティの必要性を胸に刻みながら、未来に向かって情報を発信してまいります。

第５　コンプライアンス態勢の構築

（１）　リスクマネジメント態勢等の確立について

当社では２００８年２月の五輪番組情報配信問題を受けて、当該部署の業務フローを見直すだけでは不十分と考え、同年３月２６日の取締役会において、「リスクマネジメント態勢の確立に着手すること」を盛り込んだ内部統制決議の修正を決議しました。当社ではこれに基づいて、リスクの特定、評価、対処、ＰＤＣＡサイクルの整備といった一連のリスクマネジメントシステムの確立に取り組んでおります。

その流れに沿って、２００９年３月末に全社のリスク管理台帳並びに、リスクマップが完成し、２００９年度に入りリスク管理のための組織態勢の変更や規程類の整備、さらには具体的なＰＤＣＡサイクルの構築に着手しました。

そして、態勢などを盛り込んだ「リスクマネジメント規程」を４月の取締役会で制定し、規程に基づき組織態勢を変更しました。

具体的には、役員を中心としたコンプライアンス委員会を新たに設置（従来のコンプライアンス委員会はコンプライアンス検証委員会に改称）し、その下部組織として、番組内容以外のリスクマネジメントを統括するリスクマネジメント会議と、番組内容に関するリスクを統括する放送倫理会議を設置しました。

６月には、第１回のコンプライアンス委員会が開催され、２００９年度をリスクマネジメントシステム導入期として位置づけ、２０１０年度以降の本格運用に向けた基盤を構築するための基本方針等を決定しました。

方針では、社会的責任の高い放送内容に関するリスクについては、放送倫理会議を中心とした、番組改編前後のモニタリング態勢の確立や放送内容以外のリスクについては、リスクマネジメント会議を中心としたＰＤＣＡサイクルを確立など、**全社的なＰＤＣＡの確立**、啓発活動の実施による**管理職層への普及**、管理台帳に基づく**重大なリスクへの認識と対応**、**情報セキュリティシステムの確立**を定めていました。

同時に各部署で、リスク管理台帳の重要なリスクのうち、先行してリスク対応策を検討すべきリスク項目の抽出も行いました。

新たに設置されたリスクマネジメント会議ですが、１２月に開催された回において、本格運用についての方策等が話し合われ、機構改革や人事異動が行われる時期をＰＤＣＡサイクルのスタートに合わせることを決定しました。

そして２月には、社員によるＵＳＢメモリー紛失事案を受けて、問題の経緯報告や再発防止に向けた一連の対応（詳細は、情報セキュリティ態勢の項に記載）や方針が決められました。

今後も引き続き、各部署における各種のリスク対処などのチェックを進めていくとと

もに、２０１０年度におきましてＰＤＣＡの最初のサイクルが効果的に循環するよう、各部のコンプライアンス責任者を中心とした全社的な意識の徹底をはかっていきます。

（２）情報セキュリティ態勢について

１）情報セキュリティ態勢の整備全般

前項のリスクマネジメント態勢の確立の一環として、当社では２００８年度に情報セキュリティ態勢の再構築に取り掛かり、「情報資産台帳」を作成し直し社内研修などを行いました。

そして２００９年４月「情報セキュリティ管理規程」「情報資産取扱要領」を施行しました。

これらの管理規程に基づき、全社で規程の実施・実行度を監査し、問題点を洗い出すと共に浸透を図る具体的施策を始めています。

また、6月の機構改革を機に情報セキュリティ事務局の構成をコンプライアンス推進部・総務部・システム情報部とし、事務局と各部署がやりとりを重ねながら各種台帳の洗い替えを実施し、より細かな管理態勢を取っています。

そして１２月には、情報セキュリティ管理規程実施１年目であることから、監査に替えて実施状況を調査するとともにその管理責任者であり実効性を担保するべく指導する立場にあるコンプライアンス責任者の認識度を調査することを目的としたアンケートを実施しました。

その結果、全社的な意識向上と個別事項に対しての実施対策が更に必要と判断し、具体的には、当事者による自主判断だけでは実態が見えにくいことから、第三者による監査が必要で、監査過程やその後の指導・相談で、現局の対応力を高めることが可能といった結論に至りました。

今後も全社的な情報セキュリティの意識向上に向け事務局を中心に様々な方策を行っていきます。

２）ＵＳＢメモリー紛失事案とその対処

そのような中、２０１０年２月に社員による個人情報を含むＵＳＢメモリー紛失事案を受けて、その再発防止に向けた対策として「情報セキュリティ管理規程」ならびに「情報資産取扱要領」の改定に着手しました。

この事案は、社員が業務のためにＵＳＢメモリーにデータをコピーしていましたが、誤って、そのメモリを紛失し、関係者の方々にご迷惑をお掛けしたものです。

事案の発生した要因として、外部記録媒体への容易なデータ書き込みの環境と、重要ファイルの管理意識のレベルなどが指摘されました。

そこで具体的な対策を巡り、社内で協議を重ねた結果、社内のシステムと繋がっているＰＣなどの機器からＵＳＢメモリー等、外部記録媒体へのデータ書き込みについて、セキュリティ精度の高い媒体と許可されたものだけを可能とする制限の実施や、重要ファイルについて、パスワード設定を義務化することにより、万が一紛失等の事態においても、簡単に情報流出しないような高いセキュリティレベルの態勢を実行することとなりました。

（３）　コンプライアンス・ラインの運用について

当社では、社員等（社員、関係会社社員、派遣社員、業務委託社員、アルバイト等のすべての従業員、及び取引事業者の役員・社員その他の従業員）が、当社の業務に関する法令違反、社内規程違反又は企業倫理違反などのコンプライアンス違反行為等を発見した場合の内部通報制度として、２００６年９月から“ＫＴＶ・コンプライアンス・ライン”を定め運用しています。

この制度は、内部通報及び相談の窓口を設置し適切な処理の仕組みを定めることにより、当社のコンプライアンス体制を強化し、もって、放送事業者として社会からの信頼・期待に応えることを目的とするものです。

通報・相談の窓口としては、当初の社内窓口だけでなく２００７年以降、外部の法律事務所に委託した社外窓口も設け、それぞれの連絡先を記した“ＫＴＶ・コンプライアンス・カード”をすべての従業員等（関係会社、派遣、業務委託、アルバイト、取引事業者を含む）に配布して運用しています。

２０１０年３月末で、制度を開始してから３年半になりますが、この間に、社内窓口に３件、社外窓口に９件、あわせて１２件の通報が寄せられており、調査を行ったものが１０件、そのうちコンプライアンス違反と認定されたものは５件です。

なお、「コンプライアンス委員会」は７月９日の“コンプライアンス・ライン規程”の改訂に伴ない、「コンプライアンス検証委員会」に名称が変更となりました。

第６　経営機構等について

（１）　機構改革と社長室、改革推進本部の設置について

２００９年度夏の機構改革では、以下のポイントを課題としました。

１．危機意識の徹底・意思決定のスピード化・全社一体感の醸成
２．現場の活性化・本社制作センターの活性化
３．放送関連収入の拡大・収支構造の変革
４．次世代メディア戦略を構築
５．経営管理体制の一元化

これらのポイントは、激変する経営環境に対応するため経営の意思決定を迅速にするとともに、より良質な番組を制作し新たな収入を模索することを目標にしたものです。

また、エリアの視聴者に信頼され、最も必要とされるテレビ局として生き残ってゆくためには、経営の安定化が急務であり、そのためには抜本的な改革が必要と判断。既存の組織の枠組みでは捉えきれない課題に取り組み、解決策を策定するため、社内横断的な組織として６月に「改革推進本部」を設置し、現状の問題点を把握して危機意識を共有し社内の改革を行っています。

また、よりスピーディーな戦略決定が必要なことから「社長室」を設置し、中期経営計画の立案といった経営企画業務のほか、改革推進本部の事務局も兼任し、全社一体感の醸成にも寄与することとしました。

現在、改革推進本部に設置した「コンテンツ戦略」「財務体質強化」「業務改善」の３つのプロジェクトチームは、それぞれのフェーズ毎に順次、「コンテンツマルチユース事業体制の構築」「テレビ会議システムの導入」などの提言をまとめ、経営がそれについての方針や施策を打ち出すという形で、改革への取り組みを進めています。

同時に経営資源が各局に分散し情報伝達が遅くなった部分や、意思決定のスピードが鈍化していた部分を改善する目的で、経営企画局と経理局を統合して「経営管理局」としました。これにより一貫した予算編成と実績管理が行えるようになりました。

また、クロスメディア事業局を発展的に解消して「メディア戦略局」と「ライツ開発局」とすることで、これまでのインターネットやモバイル事業を継承し拡大させるとともに、放送関連収入の拡大を目指す戦略的セクションの位置づけを明確にしました。

コンテンツ制作の現場では、本社の制作センターの２つの部を１つに統合することで、より有機的に番組制作が行えるようになり番組単位での人的な交流もスムーズに行え、若手の制作者の経験の場も増えています。東京は「東京コンテンツセンター」

に編成部門･制作部門･ライツ部門を統合し､情報の共有や意思疎通を図るとともに、東京で制作するコンテンツの有効的な利用を目指しています。

これに加え編成制作局に新たにメディア調整担当部長を設置、コンテンツの企画、制作を行う現場と放送関連収入を担う部署等､関連する組織同士が十分なコミュニケーションをとりつつ、円滑に業務を推進できるように体制を整えました。

（２）　経営陣と社員間のコミュニケーション改善について

２００７年の再生委員会答申におきまして､経営陣と社員との間のコミュニケーション不足が当社内部の問題であると指摘されました。また２００８年２月に発生しました五輪番組情報配信問題におきましても､当社のコミュニケーション不足が大きな課題として再び浮かびあがりました。活性化委員会が３月２１日付で発表しました「活性化委員会の考え」においても、「円滑かつ迅速な社内コミュニケーションスキルを役員・社員が身に付けていくためのシステム構築も必要」と指摘・提言を受けました。

これらのご指摘を受けまして、２００７年からの局長会議事録の開示に続き、当社の重要会議である取締役会や常勤役員会につきましても、経営上の秘密・個人情報に関するものなど開示に適さないものを除き、「役員会報告」として２００９年から社内ＬＡＮ上に会議内容を開示しています。

また期の節目などの機会をとらえ､経営陣と社員との直接的なコミュニケーションの場として「全社員集会」を以前より多数開催しております。

さらに２００９年９月からは､社内コミュニケーション活性化の新たなツールとして､社内ＳＮＳ「ｈａｃｈｉ」の運用を開始し､職制を通じた社内情報の共有にとどまらず､「コミュニティ」への参加などにより部署の垣根を越えた、社員の連帯感を醸成するためのコミュニケーションツールとして活用しています。

（３）　関係会社の再構築とグループ政策について

２００９年３月期、関西テレビグループは、当社ならびに番組制作会社など、１１社の子会社からなる計１２社の企業グループとして､初めて会社法に基づく連結計算書類を作成し、株主総会で報告しました。

子会社の管理業務については､６月にグループ企業の経理業務を一元的に行う経営管理局の所管とし、グループ一体経営へ向けた体制を整えました。またグループ経営の強化を目的に、２０１１年３月期から連結納税制度を適用するための申請を行いました。

グループの再構築については、２００９年度は５月に、２００８年度に特別清算を行

っていた介護関連事業会社の清算が結了し、９月末にはソフトウェア開発やシステム運用・保守を主たる業務とする子会社について、グループＩＴ体制の効率的な運用や戦略的な構築などを推進するために、少数株主から株式を譲り受け完全子会社化しました。

また業績悪化により、京都関連コンテンツの制作と集積などを目的として設立された子会社は、９月末には業務を終了し、１１月に解散、２０１０年２月に清算結了しました。

さらにビル管理の受託業務と不動産のサブリース事業を行っていた子会社については、ビル管理業務の縮小等を機に、グループ経営の効率化を図るため、２０１０年２月１日に当社へ吸収合併しました。以上の結果、２０１０年３月期には、子会社は８社となり、当社を合わせた９社の企業グループになりました。

また、通販事業を主要事業とする子会社が行っていた当社キャラクターグッズの販売事業は、３月末を以って終了し、当社が在庫を譲り受けたうえで自社利用を中心に一部販売する体制になりました。

第７　放送人倫理の確立に向けた　教育・研修等

１)社内研修

当社では、２００７年制定した「関西テレビ倫理・行動憲章」をベースに、全社員の放送人としての倫理の確立に向けた様々な社内研修を行っているところです。

２００９年度は、４月に入社した社員に対し、２日間にわたるコンプライアンス研修を行いました。この研修ではまず、当社が起こした捏造問題について、その経緯や調査委員会から指摘された事項、さらには再生の道筋などを時系列に沿って理解を深めさせました。

さらに識者の講演や、*ケーススタディーをめぐるグループ討論*なども行い、「関西テレビ倫理・行動憲章」が意味することを仕事で活かせるようにしました。このような研修は、今後も引続き行う予定です。

また８月４日には、６月の人事異動で管理職に昇格した社員を中心に１２名を対象とした「新任管理職研修」を行いました。この研修では、リスクマネジャーとしての役割についての認識や理解を高めること、リスクマネジメントの必要性、プロフェッションとしての自覚などを中心に、講義を行いました。

２０１０年３月下旬には入社１０年前後の社員に対し、コンプライアンスを中心とした研修を行いました。

２)放送倫理・コンプライアンス研修会

２００７年４月中旬から、前述の「放送倫理部会」が中心となり、外部講師を招聘し講演と意見交換を行う「放送倫理・コンプライアンス研修会」と名づけた定期的な研修を１０数回にわたって行っていますが、２００９年度も引続き、各界から講師をお招きしてこの研修会を開催しています。

５月２２日には、消費者関連専門家会議（ＡＣＡＰ）前理事長で、当社オンブズ・カンテレ委員会委員長（当時は関西テレビ活性化委員）の蔵本一也氏による
「新しい消費者時代に向けて（テレビとのかかわり）」と題する講演会を行いました。これにより、役員・社員が、消費者行政や関連する分野の問題点など幅広い情報に触れることができました。

さらに９月２５日には、ＢＰＯ人権委員会委員で専修大学准教授の山田健太氏を講師にお招きして、「最近のＢＰＯ判断事例や番組のプロダクト・プレースメントについて」というテーマを中心に民主党政権の放送行政についてや、番組とＣＭの境界線などについて講演していただき、参加者と活発な質疑応答を行ないました。

実質の開催日は、２０１０年４月１４日と年度をまたぎましたが、「あるある問題」から３年が経過したこの機会に、改めて企業にとっての不祥事を考えるといったテーマ

で、同志社大学法科大学院兼任教授で弁護士の山口利昭氏に講演をお願いしました。

山口氏は、内部統制システム構築、企業会計関連、コンプライアンス体制整備、独立第三者委員会委員、内部通報制度における外部窓口業務など幅広い企業法務に携わっておられ、それらに関連する知識を得ることができました。

これらの研修会は，いずれの回も参加者は５０人を超え、業務等の都合で参加できない者のために、社内のＬＡＮシステムに音声データや講演詳細を公開して、随時内容を確認できるようにするとともに、支社等に向けてＤＶＤを作成しています。

２００９年度の研修会は、放送倫理に関連する分野はもとより、複雑化する業務について、より実務的な知識や情報を身につけることのできる場としての役割も果たしており、今後も引続き様々な分野の識者の方々を招いて、社員の倫理観の向上や、業務におけるスキルアップをはかっていきます。

第８　おわりに

本レポートにおいては、２００９年４月から２０１０年３月に至る１年間の当社の活動についてご報告申し上げました。また、本レポートは、社内の全ての部門が執筆を分担しております。

視聴者の皆様には当社の役員・社員の決意ならびに活動をご理解いただき、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

冒頭に述べました通り、当社は、リスクマネジメントシステムの段階的構築に取り組んでいるところですが、２月にＵＳＢ記録媒体紛失事案が発生し、関係者の方々にご迷惑をお掛けしたことを反省し、情報セキュリティ管理を含む内部統制システムの整備に引続き取り組んでおります。

また、２００８年秋の金融危機に端を発した不況の影響が未だに続く中、欧州の金融問題も発生しており、放送業界におきましても広告出稿が減少した状況から好転いたしておりません。しかしながら、放送事業者としても昨年来様々な構造転換を実施すべく努力を続けております。

売上増や新たな収入源を模索する一方で、資源配分を再検討し、持てる力を放送に集中して行かねばなりません。また、役員・社員の一人ひとりが放送人として高い志を持ち、これまでにも増して高度な専門性を身につけることで、より信頼性の高い、社会に不可欠な公共的役割を担い続けるべく努めてまいります。

放送番組の質の維持向上、視聴者の皆様に対するサービスの向上という命題は、いかに不況といえども等閑視できないことを肝に銘じ、以前より視聴者の皆様に掲げております「エリアで最も必要とされる“コンテンツ・メーカー”」そして「ライフラインとして信頼されるテレビ局」となることを念頭に、今後も本業である放送を中心とした事業運営にあたってまいります。